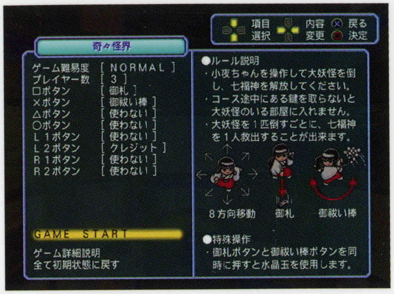

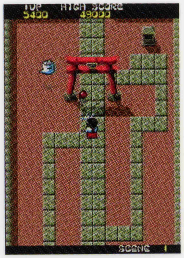

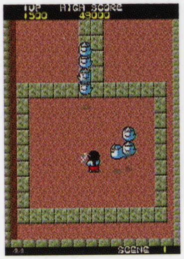

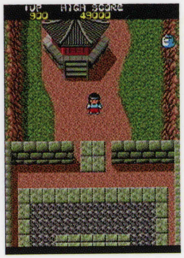

カバー：ひづき夜宵

藤原休樹 with 企画屋

IKEBOKU BOOKS ⑦

奇々怪界™
～狐の里入り～

© TAITO CORPORATION 1986, 2009

冬式未来

南向春風

藤原休樹 with企画屋
僕
IKEBOKU BOOKS⑦
奇々怪界™
〜狐の里入り〜
© TAITO CORPORATION 1986,2009

小夜ちゃん
魔奴化
奇々怪界
難波久美

目次

奇々怪界　～狐の里入り～

著者：藤原休樹ｗｉｔｈ企画屋
挿絵：ひづき夜宵

第一章　007
第二章　043
第三章　079
第四章　113

巻中マンガ：南向春風　難波久美

【人物紹介】

小夜
人間と妖怪に分け隔てなく接する、七福神を祀る神社の巫女。
現在は村人や妖怪の頼み事を聞く程度で、のんびりとした日常を謳歌している。

美紀
幼少のころに助けられたのを機に、小夜に弟子入りした。
心優しく、村の子供たちの姉的存在。

魔奴化
一時は小夜と敵対していた妖怪のボス。
今は小夜の頼もしいパートナーとして、神社に出入りしている。

リン
小夜の神社に現れた謎の少女。
狐の尾をはやしているのを見るに、妖狐と思われるが……。

序章

ちりんと鈴の音が鳴った。
そよ風が透き通る音色を運び、木々の合間を縫うように遠くまで運んでいく。
森は新たな季節の訪れを知らせるように葉を落として、その一つ一つを鮮やかな紅葉に変えていた。
紅葉は地面に降り積もって土の色すら覗かせない。幼子が踏みしめるだけでその身を散らして、己の儚さを教えている。
青々とした緑が服を脱ぎ捨てて、景色が揺らぐ強烈な日差しを緩やかなものに変えた。向日葵や朝顔が咲き乱れる夏が終わり、秋という実りの季節を着こなしていた。
「ゆるりと行くがよい」
一人の女性がその森に立っていた。
この場にはそぐわない煌びやかな着物に身を包み、生地に金粉を散りばめた豪華絢爛な刺繍を見せる。それをさらに際立たせる飾り物はないものの、纏う彼女そのものが美しさで負けていない。
膝下まで伸びた長髪は風に揺れるほど柔らかい。その色は艶やかな黒ではなく、陽光を浴びて輝く黄金色だ。
流れるような曲線を描いた豊かな体つきには妖艶さすら感じる。切れ上がった目は凛々しさと厳しさを両立させ、向かい合う者を見下ろしていた。
「はい。きっと一回り大きくなって、皆から尊敬されるような者になってみせます」

女性と視線を交わしている者は、豪華絢爛とは逆の質素な衣を纏った少女だった。
瞳と髪の色こそ同じものの、その長さは首筋で止まっている。背丈は一回りどころか二回りも違い、艶やかさとはかけ離れた愛くるしい顔付きだ。着物は麻色に統一されて、彩りを加える刺繍の一つすらない。唯一のお洒落は、腰帯に紐を巻いた小さな鈴が一つだけだ。
不釣り合いな場所で、不釣り合いな組み合わせで見合う。
だが、二人の間には張り詰めた空気はなく、むしろ打ち解けた柔らかさが漂っていた。
「我の言葉、忘れるでないぞ」
少女はどこか突き放した響きを持つ声にびくりと揺れる。
彼女はつぶらな瞳を不安の色に染めて、そっと触れるだけで崩れるような弱さを漂わせる。今にも風に流れてしまいそうな姿だが、ぎゅっと両手を握り締めた。
そして、心の中にあるであろう勇気を振り絞り、こくんと頷いた。
「その鈴は凶事を防ぎ、穢れを祓う。汝の行き先を照らして正しき道に導く。汝が惑わぬ限りな」
鈴は少女が身体を揺らす度、涼やかな音色を奏でる。それは銀仕上げの真鍮で作られて、長い月日を感じさせるものの、その神聖なる響きは損なわれていない。
静寂に満ちた空間では誰しもが耳を傾けるものだが、まるで彼女の表面に滲み出た弱さを知らせる音色でもあった。
「この外には、何が待っているんでしょうか？」
「何もかもが待っている。汝が望むもの望まぬもの、その全てがある」
「そう……ですよね……」
二人のやり取りは簡潔に済んで、必要以上の会話は行われない。
お互いは一定の距離を保ったまま、近づこうとも遠ざかろうともしない。その大半が正反対で、数少な

い似通った部分は珍妙でもある。
傍目からは不可思議な関係を想像させるものの、ある一定の絆を感じさせるには十分だった。
「どうやら、木の葉も忘れを惜しんでいるようだ」
樹木に生えた一葉が風に揺られて、はらりと散った。
ゆらりゆらりと弧を描きながら、その木の葉は少女の頭に乗る。髪の色に似た黄葉が加わり、僅かな変化を与える。
「風情もあるが……無粋でもあるな」
女性はその偶然に目を細めて、ふっと吐息を漏らした。それにつられように風が吹いて、その落ち葉を別の場所に運んでいく。
少女は視線で追いかけるように後ろを向くが、その時には捉えられないところに飛んでいた。
その視界が急に薄暗くなり、少女はハッとして向き直る。
落ち葉を散らす音すらたてず、女性は少女との距離を詰め、目の前に立っていた。
「気をつけるのだぞ」
大きくて温かい手の平が少女の頭に添えられて、まるで慈しむように触れた。その先には木の葉の欠片があり、彼女は崩れないように指先で摘むと、口元まで運んで息を吹きかけながら飛ばした。
小さな気遣いだったが、それは少女の顔をほころばせて、明るい色に染め上げた。
「色んなものを学んで色んなものと出会ってきます。暫しのお別れですが、リンは悲しんだりしません」
「それでよい。外の世界に行き、様々なものに触れて、己が身に刻み込むがよい」
女性は頭を撫でようとした手の平を引っ込めた。晴れ晴れとした顔付きになった少女を見送るため、一歩後ろに下がる。
「行ってきます。お元気で……」

自分に勢いを付けるように言い、少女はくるりと身を翻した。すたんと地面を蹴り、紅葉蓆を崩しながら走り出す。
「わたし、立派な……になります！　絶対になってみせますから！」
何度も振り返り、別れを惜しむように手を振り、回数を重ねる度にその姿は小さくなっていく。
間もなく女性の目から見えなくなり、少女の腰帯に付けた鈴の音だけが響いた。ちりんちりんと足音を刻むように鳴り続けて、徐々に霞みながらも森中に広がった。
その音は生きとし生けるものが望む清浄な空気に変化させて、ここに居を構えるものに祝福を与える。
まるで少女が最後に捧げる贈り物のように奏でていた。
「リン、健やかに育っていくのだぞ」
女性はすっと目を閉じて、その足跡に聴き入る。
風を纏わせた音はいつまでも消えず、風情を奏でていた。

奇々怪界 ～狐の里入り～
第一章

「やっと、過ごしやすくなったわね」
季節は秋。
青葉が紅葉に変わり、夏とは違う色取り取りの景色を見せ、人が身に纏う服を切り替えるには早く、しかし夜には肌寒さを感じて、上着を羽織るようになる。
完全に秋と呼べるまで、今少しの時間がかかる季節の変わり目がそこにあった。
一人の女性が竹箒を使って、地面に散らばる落ち葉を掻き集めていた。穂先を踊らせて、既に山盛りになった固まりに追加していく。
「でも……」
溜息を漏らすその身は、神社に務める巫女装束を着ていた。
襦袢の上に白衣を身につけて、その上から朱色の袴をつけている。頭に巻いた白いハチマキが、さらさらとした黒髪で引き立つ。その長髪は腰まで伸び、先の方を白布で結んである。
物腰は穏やかで、一つ一つの動きが流れるように行われている。見た目よりも大人びているが、大人と

言うにはまだ月日が必要な姿だ。
「これはこれで過ごしにくいとも言えるのよね」
巫女は草履と足袋の間に入った落ち葉の欠片に気づいて、つま先立ちで一度履き直す。
昔、福の神である七福神が妖怪にさらわれるという大事件があった。
世界はあらゆる幸運を失って滅びようとしていたが、七福神に仕える巫女によって無事救われた。それ以来、妖怪は改心して目立った悪さをしないようになっている。
その巫女の名は小夜。知る人ぞ知る救世主である。
彼女は他にも黒マントを羽織った謎の怪人と戦ったり、かぐや姫を助けるために鬼族と戦ったり、ヤマタノオロチを再封印するために戦ったのだが……。
「境内の掃除はこの時期が一番億劫なのよね……」
三度に渡り世界を救った人物は、そんな素振りを微塵も見せず、境内の掃除に頭を悩ませていた。
小夜は参道に散らばる落ち葉から目を逸らして、自分の場所から見下ろせる景色を楽しむ。
人里から離れた高台に建っている神社。そこは周囲が山に囲まれていて、緑に満たされている土地だった。
山から湧き出るせせらぎが、あちこちに住まいを構える動植物に恵みを与えてくれる。その先にある人里は畑を耕して、時には動物を狩り、それぞれが慎ましい生活を営んでいる。
緑と動物と人間が見事な調和を保っている場所は、そう多くない。
三種がお互いの利便をわかち合い、時折小さな諍いが起こりながらも極々平和な土地。
しかし、ここまで出来過ぎた条件があるわけもなく、ここには他と違う特徴がある。
ろくろ首、ぬりかべ、砂かけ婆、一つ目小僧……。
人間には解明できない奇怪な輩である妖怪。その人成らざる存在がそこら中に闊歩して、人里だけではなくあちこちに被害を与えている……というわけではない。

この土地は多くの妖怪が自分の住処として、人に悪戯を仕掛けたり、夜中にどんちゃん騒ぎをしたりと勝手気ままに過ごしている。妖怪も含めた四種がとても奇妙な調和を持って暮らす土地だと言える。
「大人しいのはいいんだけど、少し考えものよね……」
小夜は景色を眺めようと細めていた目を戻す。
ここは、神職に就く者が立ち寄れば、妖怪の多さに失神して逃げ帰ってしまうような土地だ。事実、彼女は何度か介抱した経験があるだけに頭が痛い。
そして、妖怪が大勢いる理由は一つ。
過去の大戦で、妖怪の親玉だった化け狸の魔奴化が小夜と親友となり、頻繁に会いに来ているためだ。
その影響で身を寄せる者が多く、百鬼夜行も真っ青な密度になっている。
それでも何事も起こらないのは彼女の人徳が為せる技だ。
「……こういう時に限って魔奴化がいないのよね。ついていないわ」
小夜は溜息に続いて欠伸を漏らした。休憩を終えて、今まで背けていたものに目を向ける。
秋といえば紅葉、紅葉といえば落ち葉、落ち葉といえば掃き掃除。
（鑑賞するだけでいいのなら幸せだけど、生憎、私はこの神社の巫女なのよね……）
自然が生み出した芸術品も、当事者にとっては手間がかかるだけのもの。掃除は毎日行われるが、緑が豊富な山間部にある以上は多勢に無勢だった。
まだ朝餉も済ませていないため、小夜は残り少ない絞りかすのような気力を消費しつつ、出来うる限り手早い掃除を続けた。
「ここまで掃除すれば、しばらくは保つわね」
小夜は神社から鳥居までの掃除を済ませて、程良い充実感に満たされていた。ぴんと全身を立てて、よ

うやく終わった朝のお務めに安堵する。
「よーし。掃除はここまでにして、朝餉の手伝いでもしようかな」
山間から飛び出したばかりの太陽は、その眩い日差しを大地に降り注いでいる。
小夜は両手を左右に広げて、猫のように大きな欠伸をした。朝一番のお務めを終えて、社務所に戻るために向きを変えるが。
「あは、あはは……」
空笑いと共に引きつる頬と、ぴくぴくと動く眉毛。
そよ風が運んだのか、たんに木の葉が落ちたのか、小夜の前には再び落ち葉の絨毯ができつつあった。
「し、しつこければしつこいほど、掃除にもやり甲斐が出るってものよね……うん」
落ち葉と共に積もるある種の感情を抑えて、連日のように続く無限地獄を良い方向に持っていく小夜。
「小夜さーん！」
そこにかけられた呼び声。
神社の脇にある社務所から、女の子がお玉を片手に出てきた。早足で近づいて、小夜の後方にある太陽のように晴れやかな笑顔を見せる。
「美紀ちゃん、どうかしたの？　お塩が足りなかったりした？」
「いえ、そうじゃないんです。下準備は終わったんですけど、小夜さんの希望を聞いておこうかなーと思って……」
彼女は小夜と違って袴は深みのある緑で、頭に巻く白布は髪をまとめるための留め具にしていた。朝餉の準備のために結わえた長髪は子馬の尻尾になり、美紀が動く度に左右に揺れる。
美紀は自分の性格を示すように、溌剌とした明るい雰囲気をまとって相手に壁を感じさせない。時折失敗したりするものの、他人に落ち込む姿は見せない。

大人とは言いがたいものの、表面的な子供っぽさに隠された魅力が存在する。小夜とは違う可愛さで比べようのないものだ。胸付近の体つきが圧倒的に誰かに勝っているのだが、その当人には自覚がない。この神社、最大の謎であり禁忌(タブー)である。

「やっぱり選択権は小夜さんにあると思いまして。聞きに来ました」

そう言い、美紀は大先輩にあたる巫女に憧れにも似た視線を向けた。

彼女は幼い頃に小夜に助けられたことがきっかけで、見習い巫女として住み込みで働いている。最初こそ拙(つたな)くて失敗続きだったが、今では神社のお務めをきっちりこなしながら修行に励(はげ)んでいる。

小夜にとっては大事な家族であり慈しむべき妹である。

「ずばり、お味噌汁とすまし汁です。今日はどちらの気分ですか？」

「これはまた……おかしな選択肢ね。美紀ちゃんの好きな方でいいんじゃない？」

「いつもならそうするんですけど、昨日は村の人がお醤油とお味噌を持ってきてくれたじゃないですか。まずどちらを先に味わうべきか悩みまして……」

美紀はお玉を自分の額に添(そ)えて、ぐりぐりと押しつけた。

その可愛い素振りに笑みをこぼしつつ、小夜は自分の鼻腔(びこう)をくすぐる匂いに刺激される。

かすかに香ばしいお焦げの匂いに加えて、焼き魚から漂う塩っ気。

思わず引き寄せられそうになり、きりりと引き締まった顔がだらしなく緩んでしまう。

「私はどっちでもいいんだけど……そうね。手間がかからないすまし汁を選択するわ」

小夜は空きっ腹には厳しい誘惑から耐えるため、箒の先を地面に押しつけて耐える。

(何でもいいから早く食べたいなんて、せっかく聞いてくれた美紀ちゃんに言えるわけないものね)

そんな本音を心で漏らしつつも、自分の希望を素直に口にしたが——。

「安心してください。小夜さんが空腹で倒れないように手早く仕上げてみせますから」

物の見事に気づかれていた。まるで読心術を使ったような口振りで、美紀は得意げにお玉を振る。

「これでもあたし、小夜さんのことはよーく知っているんですよ。お腹を空かせた時は顕著(けんちょ)なのでわかりやすいんです。例えば……」

美紀は自分の目尻を指先で押さえて、ぐいっと上に持ち上げた。

「こんなふうになっちゃうんですよ。まるで機嫌を損ねた猫さんです」

「あんまり自覚したくはない顔ね」

神社のお務めは交代制で、主に境内の掃除と社務所の雑用に分けられている。今日がその入れ代わりで、小夜が余計に億劫だった理由だ。

「掃き掃除、今は落ち始めだから疲れるのよね」

「昨日はそうでもなかったんですけど……風が吹いているせいかもしれませんね。当分この調子だと思うと憂鬱(ゆううつ)です」

美紀は一枚、また一枚と舞い落ちる紅葉を目で追いかけていた。

その言葉の割には、気が塞いだ様子は見受けられない。しかし唐突に頬を膨らませて、面倒がると言うより拗(す)ねた態度を見せる。

「何とか楽しむ方法を探そうとしたんですけど、無理でした……」

風船のように膨らんだ頬。小夜は両手で引っ張りたい衝動に駆られたが、既(すんで)の所で思いとどまる。

「景色だけなら綺麗なのにどうしてこうも大変なんでしょうね」

「世の中、上手い具合に釣り合いが取れているものよ。綺麗なだけなんてなんだか不気味じゃない？」

「それはまあ……そうかもしれませんね」

ひらりひらりと途切れない落ち葉の連鎖から視点を変えて、二人は神社から見える景色を鑑賞する。

色鮮やかな朱色や黄色、橙色にまだ色を変えない木の葉もあり、息を吐くことすら忘れる美しさがある。

その色合いは風が吹くたびに変化して、決して飽きることのない絵画を思わせた。

小夜もこの瞬間だけは空腹を忘れて、この土地に居を構えていることを感謝する。

「私たちが毎日のように楽しむ分、掃除しないといけないわけよ。大変だけど受け入れないとね」

崇高な想いは天よりも高く伸びて、人々の胸に深く吸い込まれる。しかし、そんな想いは長く続かないもので、俗っぽい願いにあっさりと塗りつぶされる。

「で、物は相談なんだけど……」

小夜はちらりとお玉に視線を向けた。

「朝餉を口にしたら、掃き掃除も快適にできそうなんだけどね？」

「あっ！　す、すみません！　すっかり忘れていました！」

神社からの絶景に見とれていたのか、美紀はその指摘に飛び上がるほどの勢いで驚いた。お玉が手からすっと離れてしまい、空中に浮かぶそれをお手玉のように跳ねさせて、地面スレスレで受け止める。

「す、すぐに用意します……ふぅ……危なかったぁ……では準備してますね！」

美紀は立ち上がると小走りで社務所に戻っていく。

紅葉に満ちた境内で小夜一人が佇む。

昨日、魔奴化が二人の巫女を訪ねて、皆を連れて宴会に出かけると話した。そのため、今この土地の大半の妖怪が出払っている。連日にわたる大宴会になるので、人間に迷惑がかからない場所でどんちゃん騒ぎをするらしい。

日常的に騒がしいやり取りが消えて、小夜は一抹の寂しさを覚えた。

「こういう日も、たまにはいいわ」

小夜はそう呟いて、澄んだ空気を胸一杯に吸い込んだ。目を開けると、拍子抜けするぐらい穏やかな色が目に広がるまるで当分の平穏を約束しているようだ。

「平和よねぇ……」

社務所は神社の事務を執り行う場所であり、巫女がその生活を営む住まいでもある。台所や風呂、雑務の処理や居間を兼ねた客間、他にも二人が就寝する部屋があり、そこで日々を過ごしている。

大きな神社では住居と分かれて社務所が建っているものの、小夜たちの神社では兼用となっていた。

小夜は一通りの掃き掃除を終えて、朝餉を取るために客間にいた。

床の間は派手ではないが、七福神を描いた掛け軸が飾られている。滅多に招くような客人がいないため、陶器に花は生けられていないが、部屋にささやかな色合いを加えている。本来は絵画や置物を鑑賞するべき場所だが、この神社では生活を営む一つの部屋だ。その上部と下部にある収納空間は、地袋や天袋と呼ばれて雑務に使う道具が主に収められていた。

部屋の中央には長方形の座卓があり、そこには既にお膳が並んでいる。平皿に乗った焼き魚は表面を焦がして、香ばしい匂いを放っている。大根と白菜の漬け物は程良い塩気を感じさせて、すまし汁にあるお麩やネギがゆらゆらと浮かぶ。ご飯を入れる茶碗は空のままだが、卓の脇にあるお釜が敷板の上に乗り、そこからほのかに甘い匂いを漂わせる。

日によって何品か入れ替わるものの、二人が普段から口にする基本的な献立だ。

「お待たせしました。出来立てでほやほやで美味しいですよ」

お膳を運び終えた美紀が部屋に戻り、台所に繋がる障子をすっと閉じた。くるりと反転すると、束ねられた髪が朝餉を喜ぶように跳ねる。

「小夜さんもどうぞ。早くしないと冷めちゃいますよ」

「そうね。ずっといい匂いがしていたから大変だったわ」

小夜は長髪を手で持ち上げるように支えて、卓の前に正座する。それに続いて、美紀もその向かい側に腰を下ろす。
「では、この里に恵みを与えてくれる神様に感謝しつつ……」
「いただきまーす！」
二人で手を合わせて、ぺこりと一礼。弾けるような声を皮切りにして、小夜が待ちわびていた朝餉が始まった。いつもより手を付ける速さを上げて、焼き魚をぱくぱくと平らげていく。
「そ、そういえば、境内の掃除はもう終わったんですか？」
「一区切りはね。食事を終えてひと休みした頃には元通りだと思うし、当分はこの調子で続きそう」
「秋、ですものね」
「そう。秋なのよねぇ」
小夜は部屋から映る秋の断片を眺めつつ、四季折々にある難点を思い浮かべた。正座する際に踏みつけないように寄せた髪がしんなりとして、どことなく元気を失う。
「あ、あの、子供には気をつけてくださいね。夏の暑さでしばらく来なくなっていましたけど、涼しくなったせいでまた遊び場にしているんですよ」
「そうなの？　ここでお務めしていたけど、全然気づかなかったわね」
「社務所には立ち入らないように叱っていますから。でも、そのせいで大変な目に遭いましたけどね」
秋の風物詩の一つ。村の子供による悪戯騒ぎ。
その年によってまちまちだが、暑い夏が終わって涼しくなると、子供が村から神社まで遊びに来る。
当然、無邪気な子供に悪意がなくとも、境内の掃除に甚大な被害を及ぼしてしまう。他の遊び場に行く

ように諭しても聞かず、怒っても次の日には何事もなかったように現れる。
今年もまた来てほしくない風物詩が訪れて、美紀は眉を上げて不満を漏らす。
「わざわざ木を揺らしたり、箒で脇に退けた紅葉を散らすんですよ？　あれじゃいつまで経っても終わりません。ここは七福神を祀る神社なんです。村の人たちが何事もなく過ごせるために務めているのに……」
「子供なんて気ままなものよ。叱るだけならともかく、そんなふうに言ったらいけないわ」
「小夜さんは大人ですね。あたし、つい怒って追い回してしまいます」
「それでいいんじゃない？　私も偉そうなこと言えるほど大人じゃないわよ。悪いことばかりでもないし」
小夜は今年の夏を振り返りつつ、寛容の精神を持って口にした。
村人は度々神社を訪ねて、衣食の差し入れを持ってくる。その際には子供もついてくるので、ていのいい遊び場として認識されていた。
夏場は頻繁ではなかったものの、子供が大軍を引き連れて手水舎やそこにある柄杓を使って遊んでいた。その時の騒がしさに比べれば大したものではない。
「子供の一人や二人ぐらい、簡単にあしらってみせるわ。仕事は掃き掃除だけじゃないし、手早く済ませないとね」
「だといいんですけど……あたしは心配です。この前も休憩を兼ねてここに戻った後、掃除を再開しようとしたら元通りになっていましたし……日に日にひどくなっているんですよ。はぁ～」
束ねてあった後ろ髪をほどいた美紀の黒髪が揺れ、この世の怨嗟を全て吐き出すような溜息を漏らす。
「その様子だと、今日からしばらく大変そうね」
「何ならあたしが代わりますよ。子供の扱いなら慣れていますし、小夜さんよりうまく追い払えますから」
「そんなわけにはいかないわよ。美紀ちゃんの先輩として、きちんとお務めを果たさないとね」
小夜はぱちりと片目を瞬きさせて、落ち着きのある物腰から愛嬌を振りまく。そして、今日の掃除を気

楽に考えた言葉を漏らす。
「紅葉が山になって積もるわけじゃないし、うんざりするようなものなんてないわよ。きっと」
小夜は掃き掃除を再開するため、境内に戻っていた。
美紀も子供が来ていないか確認しようと、茶碗の片付けを後回しにしてついてきたのだが。
「こ、これは……あたしたちが知らない内に嵐でもやってきたんでしょうか？」
美紀がまん丸とした瞳をぱちくりさせて、目の前に広がる惨状に端的な状況説明を口にする。
「こんな局地的な嵐があるのなら聞かせてほしいわね……」
「ここまでくると、掃除どころじゃ済まない気がします……」
こんもりと降り積もった落ち葉。どこから運んできたのか、そもそも人為的なものなのか、二人が絶句する量が境内にあった。
場所は鳥居から神殿に続く参道にかけて。量は二人の身体まで埋まるほどの多さ。手水舎や本殿は完全に埋もれて、既に一つの小山と化している。
「もしかして、仙山さんが風でも起こしたんでしょうか……」
「あの天狗はこんな悪戯なんてしないと思うけど……人為的なものを感じるわね」
この土地にいる妖怪の一人を容疑者から外しつつ、小夜は天災とは言いがたい突発的かつ不自然な状態に首を捻る。
落ち葉はくっきりと線が引かれたように積もっており、社務所にはまったく被害が出ていなかった。
不幸中の幸いとは言えないが、彼女は朝餉がひどい有様にならなくて済んだと胸を撫で下ろす。秋の風景に酔いしれた自分に反省しつつ、箒が豆鉄砲になったことに嘆息を漏らす。

「どこから手を付けたらいいのやら。これ、一日やそこらじゃ終わらないわね」
「他にも本殿とかお賽銭箱とかありますし、その掃除を入れたらもっとかかりそうです……」
「うん。そこが一番の悩みどころなのよね」
本殿は落ち葉を掻き分けなければ入れない状態だ。ご神体がどうなっているのか想像して、小夜の額から冷や汗が一筋垂れてしまう。
「本当、何ともなければいいんだけど……」
相当な時間を要する掃き掃除も大変だが、それ以上に落ち葉の処理方法も困りものだ。脇に退けるには大量だし、焼き芋に使おうものなら山火事になってしまう。
地道に周囲の森まで運んでいき、均等に撒いていくしかないのだが、何日かかるのか見当もつかない。
「あの子供たちが短時間でこんな大がかりなことなんてできないわね……」
「この前子供を追い払った時、もっと派手にしてやるなんて言ったので、もしかしたら……でも、さすがにやり過ぎですよね？」
「元気で走り回るのはいいんだけど、ここまでされると困りものよ。でも……現実的とは言えないわね」
「ですよね。あの子たちが何だか確証めいた言い回しをしていたのでつい……」
「まあ、実行犯じゃなくても、何かしら関係しているかもしれないわね。そうだとしても、まずは掃除が最優先だけど……」
小夜はどこから手を付けたらいいのかわからず、落ち葉の王国と化した境内をじっと眺める。
（雨が降られたら余計に掃除が大変になるわね……）
小夜は豆鉄砲を振るう覚悟を決めて、萎えかけた気力を奮い立たせた。頭の白布を締め直して、自分に気合を入れる。
「うわっ！　やべっ！」

そこに聞こえた子供の声。二人が振り向くと、鳥居の先に三人の男の子が驚いた顔を見せていた。
ぼさぼさ頭のやんちゃ坊主。夏は過ぎたものの、小麦色に焼けた肌が健康的に映って、毎日太陽の下で駆け回っていたことを物語っている。小さな擦り傷が一つ二つあるが、まったくお構いなしだ。三人とも似たような無地の和服を着て、所々破ったり縫った跡がある。
その顔は三者三様だが、猛犬と野犬と飼い犬に例えられる。
猛犬と野犬は似た者同士で、すぱっと刈り上げたいがぐり頭か、ヤマアラシのように癖のあるざんばら髪かの違いだ。残るもう一人は直毛で整っているものの、雑な切り目のせいでその良さが損なわれていた。はた迷惑なことが起こる度、その下手人に挙がる有力候補で、小夜もしっかり顔を覚えていた。
「こら！　あんたたち、どうやってこんなことしたのよ！」
美紀がその存在を認識した途端、柑橘類のような爽やかな表情に般若のお面が引っついた。小夜から箒を借りて、ぶんぶんと振り回しながら子供に近づいていく。
「あんたたちも掃除を手伝いなさい！　ここは遊び場なんかじゃないんだからね！」
「美紀のお姉ちゃんだ！　取っ捕まる前に逃げようぜ！」
子供たちの動きも機敏で、彼女が追いつくよりも早く階段を駆け下りていく。
「こらー！　待ちなさーい！」
素早くて小回りの利く子供と巫女装束を着た女の子では勝負のしようがない。
子供はあっという間に逃げて、山道まで下りきってしまう。鳥居から見下ろすと豆粒の大きさで、今から縮められる距離にはいない。
階段の半分ほどまで頑張った美紀も、箒を持つ手をだらりと下げて、とぼとぼと戻ってくる。
「捕まえられませんでした……」
「気にしなくていいわよ。でも、あの子たちが何か知っているのは間違いなさそうね」

「明らかにまずいと言いたそうな顔でした。今回の事件に関わっていることは確実です」
美紀は背中から炎をめらめらと燃やして、箒の柄を握りつぶしそうな勢いだ。
だが、基本が怒り顔に向いていないので、小夜には怒っていると言うよりは不機嫌なだけに見えた。
「大事件です！　あたしたちの与り知らぬ場所で、世界の危機が訪れているのかもしれません！」
「そんなに何度も危機が訪れたら、神様もてんてこ舞いになって近い内に倒れるわよ」
「そ、そうですか……」
小夜は美紀をなだめて、別方向に進みかけたやる気を鎮火させた。
とはいえ、ここまで大事だと、小夜一人で進めたところでいつ終わるかわからない。社務所の仕事は休んでもらって、二人がかりで取りかかるしかない。
「誰の仕業にしろ、紅葉を集めて飾るなんて洒落ているじゃない。後で犯人を見つけて叱らないといけないけど、悪いところばかり見るのも疲れるだけよ」
「小夜さん、大人です……」
「またそんなこと言って……私も普通の女の子なんだけどな」
小夜は眼を輝かせる美紀の言葉を謙遜した。肩をすくめて、その鋭い目尻を下げて表情を柔らかくする。
「あの子供たちが関与しているにしろ、妖怪の悪戯にしろ、まずは本殿を綺麗にしないといけないわね。あのままにしてたら神様に怒られるわ」
ずっと呆けるわけにはいかず、小夜は巫女装束の袖を捲って気合を入れた。落ち葉の王国に数少ない戦力で立ち向かおうと、その幕を開く。
「美紀ちゃんはそこにいて。本殿の山を崩してからどう片付けるか考えましょ」
「あっ。で、でも、き、気をつけてくださいね。何があるのかわかりませんから」
「大丈夫よ。単に落ち葉が固まっているだけだし、外側から掻き分ければすぐに顔を覗かせてくれるわ」

本殿は落ち葉の固まりに覆われて、歪な球体となったままだ。普通なら風に吹かれて崩れてもおかしくないが、芸術的バランスによって形を留めている。
はた迷惑極まりないが、小夜はひとまず神殿の清掃に専念すると決めた。紅葉の絨毯、もとい布団となった参道を横目にしつつ、その脇を歩き本殿に向かう。
美紀もその後に続いて、てくてくとついてくる。
「ある意味、圧巻ね」
「あたし、小夜さんがいなかったら、きっと夢だと思って寝直しちゃいますよ……」
二人は本殿の前で足を止めて、ほぼ同時に溜息を漏らす。
どでんと目の前にそびえ立ち、巨大な障害となっている塊。
小夜はもう一度袖を捲り、後ろにいる美紀との距離を確認する。
「さて、思い切って崩してみるから美紀ちゃんは離れてて。汚れるのは私だけでいいわ」
建物を取り囲む落ち葉が崩れたら、ぱらぱらと砂や小石が身体にかかってしまう。
多少の汚れは逃れられないが、掃除は得てしてそういうものだ。一段落したら湯浴みをして、一日の疲れと一緒に落としてしまえばいい。その被害を最小限に抑えるため、手を振りながら声をかける。
「は、はい。でも、普通に崩してもいいんでしょうか？　何だか……嫌な予感がします」
「考え過ぎよ。どちらにしろ、本殿をこのままにするわけにもいかないじゃない？」
「そ、そうですよね。この神社に勤める巫女として、神様に苦しい思いをさせたらいけません」
「ええ。そのためにもここから終わらせないとね」
小夜は紅葉の山が崩れた際の心構えを済ませた。目蓋にかかる前髪を上げて、その大きさをしっかり確認しながら次の一歩を踏み出す。
「何事もありませんように……」

そう言いつつ、本殿を取り囲んでいるそれに手を突っ込むと、がさりという音を耳にした。思った以上の深さに眉を寄せて、そのまま両手いっぱいに掻き出すと――。
「えっ？」
唐突に伝わった乾いた木の葉と違う感触。落ち葉で覆われた一つの層を抜けて、その先にあったものはぐちゃりと腕に絡みつくたっぷりと水分を吸い込んだなにか。
そして、腕の付け根まで突っ込んだ肌を這う正体不明の何かが加わる。例えばそう、緩めの堆肥に似た感触が彼女の両腕に伝わった。
「さ、小夜さん！」
美紀の呼び声が耳に届いた。
建物を覆うものの正体に気づいた小夜は、身体が硬直してしまう。
彼女の全身を今にも覆おうとする巨大な影。太陽の光を遮り、絶妙な釣り合いを保ったものが壊れて、本殿から離れようとするもの、それは落ち葉と堆肥の固まり。その一つは城壁のように大きく、運悪く小夜に向かって傾いていた。
唐突な出来事と嫌悪感から抜け出せていないため、彼女は呆然と眺めるだけで動けない。
そして――。
「んぶっ！」
びちゃんという音を立てて、寡黙な強敵が玉砕覚悟で体当たりを食らわした。
「さ、小夜さん……？」
多量の水分を含んだ堆肥のような泥は、あちこちに甚大な被害を与えた。
美紀は地面に直撃する寸前に回避し、巫女装束に少し泥汚れがついた程度ですんでいた。
「あ、あの……大丈夫ですか？」

茶色の固形物と化した何かに声をかける美紀。

落下前と同じポーズでなければ、彼女もそれが小夜だと気づかなかっただろう。

時間が経つにつれて、表面の泥が流れ落ちていくものの、べったりとついたものは変わらなかった。田んぼでひと泳ぎした後のような惨状で、泥まみれという言葉では足りない。

泥には落ち葉や木の枝が混じり、そのみすぼらしさに拍車をかけている。肌や巫女装束に貼り付いて、自慢の黒髪は見るに堪えない状態だ。

前髪もべっとりと顔にかかり、服を着替えて夜中に歩き回れば、立派な幽霊として活躍するだろう。

「全身に浴びていましたけど……怪我（けが）はしていませんか？」

美紀が恐る恐る話しかけるが、彼女の反応はまったくない。ぴくりともせず、金縛りにあったように静止している。

「よ、よかったですよね。何だか本殿は無事のようですし、あえて火中の栗を拾った甲斐（かい）がありました」

本殿はシャボン玉のような層ができていたのか、不思議と堆肥まみれにはなっていなかった。落下物の影響で汚れてはいたが、何日もかかるほどではない。

本当なら二人で喜ぶべきことなのだが、今は些細な問題にすり替わっていた。

「小夜さん？　あの、本当に大丈夫ですか？　必要ならすぐに湯浴みの用意をしますけど……」

小夜の身体からぼたぼたと落ちる泥は勢いを弱めて、そよ風と太陽の日差しが嫌な具合に乾かしていた。まだショックが抜けきっていないのか、無表情で空を仰いだままだ。そのまま完全に乾くまで固まっていそうだったが、不意にその身体が小刻みに震えた。

「ふ、ふふふ……」

小夜の全身から、堆肥が蒸発するかのような怒りのオーラが噴き出した。

彼女は満面の笑顔を浮かべたまま、お面を貼り付けたようにまったく変化しなくなる。

「美紀ちゃん……」

「は、はい！」

とてつもなく低い声の呼びかけで、美紀は直立して返事をする。

「神社はね、私たちの生活を見守ってくれる神様を祀る場所なの。とっても大切な場所なの。すっごく大事にしないといけない場所なの。冗談だとしても、こんな度が過ぎた悪戯は認めちゃいけないの。二度とこんなことをしないようにきついお灸を据えなきゃいけないわね」

「で、でも、そこまで気にしなくてもいいんじゃないでしょうか？　子供の仕業だと判明したわけじゃありませんし、ここは一つ、大人の度量の広さを見せるのもいいと思います」

いつの間にか二人の立場が入れ替わり、美紀が小夜をなだめるようになっていた。手振り身振りを加えるが、その効果はほとんどない。逆に、ガシッと両肩を掴まれて、その眼を捉えられる。

「私はね、普通の女の子なの。他の人と同じように堪忍袋の緒は普通にあるのよ。こんな目に遭って冷静でいられるほど、忍耐力は鍛えあげられていないの」

泥まみれの巫女は頬に落ち葉を貼り付けたまま、熱弁を振るう。その押しに美紀がこくんこくんと頷くと、すっと離れて鋭い眼光を鳥居の先に向けた。

「ふふ、ふふふ……待っていなさいよ。こんなことをした犯人を見つけ出して、嫌って言うほどお灸（きゅう）を据えてやるわ！」

乾いた泥が震える拳からぱらぱらと落ちて、そこから薄（うっす）らと肌色を覗かせる。

何度も世界の危機を救った七福神の巫女――小夜。その何とも下らない私怨（しえん）に満ちた戦いが今始まった。

「とは言うものの、手がかりなんて一つもないのよね……」

小夜は神社から離れて、獣道に似た山道を歩いていた。
神社では紅葉ばかり目に付いたが、実際は栗を初めとする山の果実やキノコもあちこちにある。落ち葉を隠れ蓑にして駆けるリスや犬か狼の鳴き声を見聞きして、彼女は周囲にある生命の息遣いを感じていた。
もちろん全てが緑で覆われているわけではなく、人の営みも至るところに刻まれている。神社から踏みならした道がいくつも伸びて、その一つが近くの人里に繋がっていた。
「情報収集だなんて……しのぶちゃんがこういう時にいたらお願いできたけど、今はいないんだから一人で何とかしないといけないわね」
小夜はさっきの子供に詳しい話を聞くため、そちらに足を向けて進んでいた。
あの名状しがたい惨状から一時（いっとき）が過ぎて、太陽は既に真上まで昇っている。
最初はすぐさま出かけようとしたが、美紀の勧めでまず先に湯浴みを済ませた。
巫女装束も替えの服を棚から出して、前の服は現在洗濯中の身だ。多少の臭いが残っているものの、そこは妥協するしかない。
美紀は社務所の仕事を置いて、本殿や手水舎などの建物を優先的に掃除している。境内は一日やそこらで終わらないので、そのままの状態で保留した。
あの悪質な悪戯をしかけた者が誰にしろ、犯人が判明しなければ二回目の犯行も考えられる。掃除が終わりかけた時に仕掛けられたら、美紀まで悪意に染まる可能性も捨てきれない。
自分の平穏な生活を守るためにも、迅速に犯人を捕らえる必要がある。
小夜は無駄な使命感に燃えつつ、村までの野道を辿（たど）っていく。
（妖怪の仕業としか考えられないんだけど、あんなことをしでかすやつの心当たりがないのよね）
昔はともかく、今この土地にいる妖怪は、人を驚かしたり怖がらせたりする茶目っ気はあっても、ああいう実害が出る悪戯は滅多にしない。

（見過ごしているのかもしれないけど、わかっていることから突き止めていくしかないか）
そう心の中で呟いて、彼女はのんびりとした足取りで進んだ。
あくまでも景色を楽しむ余裕を持ち、周りに散らばるあれこれを目の保養にしている。その視線を野道の先に向けると、見覚えのある人影が視界に入った。
「ん？　誰かと思えば小夜さんじゃねえか」
一番最初に目についたものは、地味な麻色。その色で統一された衣服を着た男性が手を振った。長く使い込んでいるためか、裾や袖が破けていて、土の汚れが目立って無頓着な様を見せる。
畑仕事で引き締まった身体と、その作業で日に焼けた顔と無精髭。空いた手にはひょうたんを括（くく）り付けた紐が握られて、どこかおぼつかない足取りで歩いていた。
「おはようございます。朝からお酒を飲むなんて健康に良くありませんよ」
小夜はこの前、味噌や醤油をお裾分けしてくれた人と気づいて頭を下げる。
「酒は百薬の長ってね。今日はすることもないからこうやって散歩してるわけだ」
「そんなこと言って、奥さんから用事を頼まれているんじゃないんですか？」
村人は図星を付かれたのか、からからと笑ってごまかした。その口から酒臭い息を吐きつつ、随分と飲んでいることを教える。
「その様子だと村まで行くんだろ？　ウチの若い奴が馬鹿やって祈祷（きとう）でも頼まれたのか？」
「いえ、そういうわけじゃないんです。今日は村の様子を見に行こうと思いまして」
「そうか。小夜さん一人じゃ危ねえし、おいらが村まで連れて行ってやるよ」
どんと自分の胸を叩いて、その腕っ節の強さをアピールする。
「助かります……あ、そう、ここ最近、村でおかしなことはありませんか？」
「おかしなことねぇ。昔はおかしな騒ぎが起こったりしたけど、ここしばらくおとなしいもんだしな」

「気になったことでもいいんです。いつもと違うことがあれば、私が調べておきますから」
　神社の悪戯に関する情報を期待して、小夜は軽く質問を投げかける。
　男性はそれに応えようとしているのか、腕を組んで自分の頭をぐるぐると回した。しかし、なかなか出てこないのか単に何事もないだけか、しばらく間を置いても変わらない。
　彼女が村には何の変化もないと結論付けようとすると、その口が不意に開いた。
「そういや……他の奴が言ってただけで大したことじゃないんだが、子供の悪戯がやたら派手になっているとか聞いたな」
　小夜の耳がぴくりと反応する。
「それ、どういう意味ですか？」
「言葉通りだよ。普段なら水をぶっかける程度の悪戯で滝みたいな水が落ちてきたり、虫で驚かせる悪戯で虫の大群が現れたりと……実害が少ないから拳骨（げんこつ）一発で終わらせてるらしいな」
　ますます子供の関与が強くなり、小夜はいくつかの可能性を並べた。
　さすがにまだ情報が足りないものの、実際に話を聞けばさらに絞り込める。一瞬だったが、神社から逃げた子供の顔は彼女の頭に叩き込まれていた。
「おいらも気にはなったんだけどよ。村の奴らも小夜さんに言うほどじゃないって話しているし、放って置いてもいいと思うんだが、悪戯も度が過ぎたら叱らねえといけないだろ」
「本当に子供の仕業なら、私の出番はあまりないと思いますけどね」
「そうかい？　美紀ちゃんも含めて、村の子供には恐怖の権化になってると思うがな」
「悪いことは悪いと言わないと、今後のためになりませんからね。怒るのも愛情の内です。で、その子供に会いたいんですけど、今どこにいるのか知っていますか？　大事な話があって」
　傍目には平静に映っているものの、ふつふつと燃えたぎる感情は簡単に消えない。今も笑顔のお面をも

う一つ付けているが、二枚重ねだけあって油断したら外れてしまいそうだ。
「あいつらの遊び場は多いからここだとは言えねえけど、小夜さんの頼みだからな。日頃世話になっている分、こういう時ぐらいはお返ししねえとな」
　村人は自信たっぷりに引き受けて、捜索隊の一員として加わった。自分の心当たりを指折り数えて、まずは一番近い遊び場に足を運んだ。
　小夜は日が暮れるまでに見つかればいいと、今回の戦いを長期戦だと捉えていたのだが。
「うわ！　小夜の姉ちゃんがいた！」
　その矢先に出くわした三人の子供。追いかけっこをしていたのか、勢いがついた足を止めようとして、そのままずっこけそうになる。
「……見ぃつけたわよ」
「やばっ！　は、早く逃げようぜ！」
　三人は小夜の存在に気づいて急反転した。そのまま疾風の如（ごと）く駆け抜けて、森の奥深くまで隠れてしまった。やんちゃ盛りの子供だけあり、統一性のない動きながらあっという間に彼女の視界から消える。
「あ、あいつら……あそこまで逃げられると、捕まえられませんね」
「大丈夫です。こういう時のために用意していた物がありますから」
　小夜は標的を捉えた喜びか、似合わないぐらいに晴れやかな笑顔を浮かべた。白衣の間に手を入れて、そこから三枚の御札を取り出す。
　彼女の感情を感じ取ってか、近くの木々がざわざわと揺れて、その枝に止まっていた小鳥が逃げ出す。
「さ、小夜さん、もしかして怒っているんですか……？」
　村人が身体をびくりとさせて、おずおずと敬語で聞いている。
「まさか。私はただ、おいたをしたと思われる子供に話を聞きたいだけです。本当だったらお説教です。

まさか泥まみれになって嫌な臭いがこびり付いたり、得体の知れないものが全身を這ったことを怒っているわけじゃありません。ええ、ありませんとも」
　小夜は徐々につり上がる目尻を指で戻して、やんわりと否定する。
「人であろうが妖怪であろうが、悪いことをした人はお仕置きです」
　そう言って、式神を宿した御札に意識を集中した。それらはぼんやりと蛍のような淡い光を放ち、清浄なる力が込められていく。
　霊障による金縛りで拘束する術。心得のない者に防ぐ手立てはない。
「起・呪・縛。彼らの動きを止めなさい、優しくね」
　御札を指で弾くと、その三枚はふっと姿を消す。すぐさま子供が逃げた方角から叫び声が聞こえて、満足げに頷いた。
「行きましょう。動きを止めた先で怪我をしたら危ないです」
「今の小夜さんに比べると、よっぽど安全なような気がします……」
「何か、言いましたか？」
　くるりと首だけを曲げて、小夜は横にいる村人に問いかける。
「い、いいえ、何でもありません。はい」
　機嫌が良さそうに見える割には、まったく抑揚のない言葉。村人は完全に酔いがさめたのか、ぶんぶんと首を横に振って否定する。既に言葉使いが別人と化しているものの、小夜が目下の関心を向けるのは、森の中にいる子供だけだった。
「行きましょう。まずは詳しい話を聞かないといけません」
　その姿こそ淑やかで大和撫子を体現するようだが、なぜか笑顔が凍っている。
　小夜は脇目も振らずにすたすたと歩いて、自分が御札を放った方角を指差す。その後ろを村人がついていき、いつの間にか案内役が道中のお供に変化していた。

「ちくしょー！　動きを止めるなんて横暴だぞー！」
　御札は子供の身体に貼り付いて、小夜の言葉通りに三人の動きを止めていた。鼻を木にぶつけて抱きついていたり、片足を上げた状態で固まっていたりと、ひょうきんな格好を取っている。
　三人それぞれ、異なる場所で縛られていたが、今は村人の手で一箇所に集められている。
「逃げるからいけないの。今日は追いかけっこするつもりはないし、手早く捕まえさせてもらったわよ」
　小夜は相手の捕縛に成功させて、延々と続きそうなかくれんぼに終止符を打った。
「森の中なら姉ちゃんが相手でも逃げ切る自信があったのにな。御札なんて使うなよー」
　いつもより小夜がにこにこしているので、怒られないと高を括っているようだ。その額が青筋を立てて、ぴくぴくとしているのだが、全く気づく様子がない。
「いつもいつも付き合うと思ったら大間違いよ。今回は日が悪かったと思って諦めなさい」
　小夜は子供に逃げる気配がないと察して、御札による金縛りを指を鳴らして解いた。三人の身体に貼り付いた御札が薄らと消えていき、その消滅と共に動けるようになる。
「これでいいわね。きちんと話を聞かせてもらうわよ」
　本来の目的は神社の悪戯に関する聞き込みで、犯人と決めつけて懲らしめることではない。
「えー。まだ鬼ごっこもしていないのにつまんない」
「そうそう。せっかく涼しくなったんだから走り回りたいもんな」
「小夜姉ちゃん、どうせ泥臭いんだから汗なんてかいても変わんないのに」
　しかし、そこに投げられたものは無邪気かつ空気の読めない発言。

小夜の眉が笑顔のままでつり上がり、最後の発言を口にした子供の頬を指で摘む。
「だーれーのーせーいで、私は泥臭くなっちゃったのかなー？」
「いひゃ！　いひゃひぃよ、おふぇふぇふぁん！」
子供は小夜の両手で頬を掴まれて、容赦なく左右に引っ張られた。
「人が気にするようなことを言わないの。好きな女の子に嫌われても知らないわよ」
他の二人も同じ目に遭いたくないと思ったのか、急に文句を言わなくなって大人しくなる。
「ひっでーよ。俺たち、何にもしていないんだぜ」
「私もあなたたちがあの悪戯をしたとは思えないわ。参道だけならともかく、建物を覆った固まりはどう考えても不可能だもの」
土で建物を覆い、傍目ではわからないように落ち葉をつける。人間があの短時間で実行できるものではない。十中八九、この子供がしでかしたことではないだろう。
「そうそう。わかってくれればいいんだよ」
「いきなり犯人扱いなんてたまんないよなー」
三人はこれ以上のお仕置きはないと安心したのか、その言葉に肩を撫で下ろしたが……。
「でも、何も知らなかったとは言わせないわよ。やましいことがなければ、あんなふうに慌てて逃げる必要はないものね」
建物の中には何の変化もなく、悪戯以上の他意は感じ取れなかった。
二人が境内に戻った時は時間が経っていたせいか、周囲に妖気は感じ取れなかったが、妖気を隠すのが上手い妖怪なのかもしれない。しかし、ただの悪戯で反応を楽しみたいだけなら自分の存在を知らせてもいい。場所が場所だけになおさらだ。
「ねえ、本当は何か知っているんでしょ？」

小夜はその理由が三人にあると見極めた。目をさらに細くして、虎のように獲物を狙う鋭さで貫く。
「な、何にも知らないって。俺たちが着いたらああなっていただけで、犯人扱いされるのが嫌だから逃げたんだよ」
「それそれ。疑われるようなことなんて一つもないって」
「そう？　いつもより随分と来るのが早かったし、あれを見て冤罪を受けるなんて考えるのはおかしいんじゃない」
図星を指されたのか、三人は明らかに動揺して弁解を行う。嘘が苦手だとわかって笑みを浮かべつつも、小夜はたたみかけて質問する。
「村の悪戯も何かしらで絡んでいるんじゃないの？　正直に話さないと、親御さんから聞いてもらうことになるわよ」
子供には効果てきめんのダメ押し。三人はうな垂れてお互いの顔を見合わせた。
「俺たちのせいじゃないけど、心当たりは……あるかも」
一人が全員の代表になって手を上げて、自信なさそうに口にする。
「本当、俺たちは何にもしていないんだ。誰かに頼んだわけでもないし、誰かが悪戯するって話を聞いたわけじゃないよ。でも……」
子供は今回の発端を思い出すように空を見上げた。そうしているうちに、別の子供が先に喋り出す。
「少し前から他の奴らと集まって悪戯を考えていたんだけどさ、いざ実行しようとしたら俺らより派手なやり方でしかけた奴がいたんだよ」
「そうそう。姿を見せないからどこの誰だかわかんないんだけど、それからずっと同じように先を越されて……次第に俺たちも楽しくなってさ、あれこれ希望を言うようになって……」
その後は気まずそうに口ごもった。自分が矢面に立ちたくないのか、なかなか核心を口に出そうとしな

い。小夜はそのやり取りに溜息を漏らして、三人が言わんとすることを代弁する。

「今回は神社が標的になったわけね。それで、あなたたちはいつものように覗きに来たと」

そう自分の推理を口にすると、三人は差し合わせたように同時に頷いた。

（はぁ……。とりあえずここは、お灸の一つも据えないとね）

小夜は半分呆れつつも、お説教の意味も含めてわざとらしく嘆息を漏らした。この世の終わりのように嘆いて、芝居がかった動きで頭を振りながら髪を揺らす。

「そんなことして……知らないわよ」

「ど、どういう意味だよ」

「この土地には妖怪が多いって知っているわね？　世の中には子供の悪戯心を食べる妖怪がいてね、あなたたちのような集まりにこっそり近づいて混ざったりするのよ」

何事も臨場感が大切だ。小夜は辺りを窺うように目を細めて、一度左右を確認する。

わざわざ子供に顔を近づけると、三人もきょろきょろと慌ただしくなった。

「その妖怪はね、まず子供の口から胸の中に入り込んで身を潜めるの。誰にもバレないようにこっそりとね。もしかしたら三人の内の誰かかもしれないわね」

そう小声で話すと、三人は自分の胸に触れる。

「無理よ。そいつは一度入り込んだら自分が満足するまで出てこない。私でもお祓いできないでしょうね」

「そ、そんな……その妖怪が誰に入っているのかわかんないのかよ」

「そうね……三人の中でこの遊びに飽きている子はいない？」

自分たちより派手な悪戯とはいえ、子供は単に眺めているだけだ。ただでさえ子供は飽きっぽいのに、いつまでもそんな遊びを続けられるわけがない。現に見に行く時間も人数もバラバラなのが証拠だ。

三人は小夜の推理を裏付けるようにして、否定とも肯定も取れない顔を見せた。

「それはね、妖怪が心を食べているの……君たちの悪戯心が消えてなくなるまで自分の栄養にするわ……」

「ぜ、ぜぜ、全部食べられたらどうなるの……？」

今の季節は秋だというのに、小夜の周辺だけが百物語をした時のような肌寒さを持っていた。

「聞きたい？　ほんっとうに聞きたいの？　後悔しても、知らないわよ」

「だ、だって、聞かないとわかんないし……なあ？」

「お、おう。俺はやる気満々だけど、試しに聞いといてもいいよな」

「俺も俺も。別の奴だったら教えられるし、あんまり損しないし」

三人とも心当たりがあるのか、傍目にも虚勢を張っているとわかる。

小夜は思わず笑ってしまいそうになるが、何とか耐えて表情を引き締めた。

「…………胸を食い破るのよ」

「う、嘘だろ？　姉ちゃん、冗談ばかり言って……」

その問いかけには答えず、小夜は神妙な面持ちで首を横に振る。

「子供が悪戯に飽きると胸から出てきて、どこかに行っちゃうの」

「ね、姉ちゃんは巫女だろ？　どうしようもないのかよ」

「残念だけど……一度入り込んじゃうとダメなのよ。助かる方法は一つしかないわ」

まるで自分の力不足を悔いるように呟き、ぎゅっと拳を握り締める。

最高潮は目前。小夜は首を上げて、一人一人の顔を見つめながら口にする。

「悪戯とは逆のことをするのよ。大人たちが喜ぶ行為を続ければ、妖怪は嫌がって逃げてしまうわ。でも、そうじゃないと……」

突然の強風で木々が揺れた。

ひゅーひゅーと不気味な風切り音が鳴り、小夜を中心に紅葉を巻き上げるように集まる。理解不可能な

現象に子供の不安が掻き立てられて、三人一緒に身体をくっつけて怖がり——。
「ばりばりむしゃむしゃと食べられちゃうぞー！」
雷鳴が轟いたような音。
子供は弾かれるように飛び上がり、ひと塊になって全速力で逃げていった。お母さーんとか、置いていかないで、とか口々に叫んで、瞬く間に姿を消してしまう。
「これでしばらくは大人しくなるわね……」
小夜は間接的な原因となった子供に釘を刺し終わった。当分の安息が約束されて、ほっと息をつく。
今まで吹いていた突風は何事もなかったように静まり、すっかりと平穏を取り戻していた。空から舞い落ちる紅葉を指に挟んで、さっきの話で起きた幻ではないとわかる。
彼女は虚空からある一点に視線を動かして固い表情を崩した。
「そろそろ出てきてもいいわよ」
人間一人が隠れられるほどの幹を持つ樹木。小夜の後ろにあるそれに声をかけると、子供を叱る時にまったく話に混ざらなかった村人がその影から現れた。
「いやー、すいません。おいら、ああいう話は苦手なんですよね。後ろで聞かせてもらいましたよ」
「そうじゃなくて」
小夜は満月のように穏やかながら明るい微笑みを浮かべて、肩をすくめる。
「とっくの前に気づいているわよ、魔奴化」
自分の親友の名前を口にして、どう見ても人間にしか見えない村人に声をかけた。
ほんの少しの間を置いて、男性は驚きから喜びに表情を変化させた。そのままくるりと前転すると、ぽんという音と共に煙が噴き上がる。
「バレない自信はあったんですけど、小夜さんには勝てませんね」

煙が風に流され、そこにいたはずの者は狸と化していた。二本の足で立って人語を話し、その真っ白なお腹を露わにしている。日本の妖怪の親玉であり、小夜の親友でもある化け狸。魔奴化その人である。
自分の変化（へんげ）が見破られたのに落ち込むわけでもなく、やっぱりバレたと破顔している。
「妖気は感じ取れなかったけど、もう付き合いも長いからわかるわよ。確信したのは私が御札を使った時だけどね」
「あの時の小夜さんは黒マントより怖かったです。おいら、変化が解けると思いました」
「言ってくれるわね。あれでも気持ちを抑えていたのよ」
二人は気安い雰囲気を漂わせて、軽い冗談を言い合う。
人間と妖怪の垣根を超えた親しさで、まるで旧知の間柄のように遠慮がない。
「あなたたちをダシに使ってごめんね。ああでもしないと、懲りてくれないはずだから」
「気にしないでください。人に怖がられるのも妖怪の役目ですよ」
「そうね。魔奴化が力を使っていたから、私も調子に乗ってあの子たちを驚かしたものね」
本当は途中で嘘だと打ち明ける予定だったが、魔奴化がノリノリだったのでついやってしまった。結果オーライではあったが、子供たちの怖がりように悪い気もしてしまう。
「出来ることなら、おいらも知らないその妖怪の名前を聞かせてもらいたいです」
「単なる思いつきなのよ。そんなふうにいじめないでほしいわね。で、宴会に出かけたと思ったけど、どうしてまだここにいるの？　忘れ物でもあった？」
「いえ、宴会の参加を保留していたものに聞き回っているんです。やっぱり何人かいるんですよね」
「まるで幹事ね。その参加を保留する妖怪というのも想像できないけど……終わったの？」
「小夜さんと会う直前に終わりました。この土地にいるほとんどの妖怪がいなくなりますね」
「そう。当分は静かになるわね」

普通の人にはわからないものの、あれだけ騒がしく行き交う妖怪が姿を消す。その何とも言えない寂しさは、この土地では巫女の二人しか味わえない。ただでさえ少なくなった妖怪の気配がさらに消えて、小夜はしんと静まり返る土地に物言えぬ感情を抱いた。
「何なら小夜さんも美紀ちゃんを連れて、一緒に来ますか？　みんな歓迎してくれますよ」
その気持ちを察してか、魔奴化は二人の巫女を宴会に誘った。
「ど、どこの世界に妖怪の宴会に混ざる巫女がいるのよ」
「わかりません。でも、意外とこの近くにいるかもしれませんよ？　どうしますか？　もしも参加するのならおいらが話を通しておきますよ」
「気持ちは嬉しいけど遠慮するわ。神社の仕事はあるし、境内も綺麗に掃除しないといけないもの」
「……もしかして、子供と話していた悪戯のことですか？」
その問いかけに頷いて、どういう悪戯だったのか大まかに説明する。
「それはまた……感想を言いにくい悪戯です」
「妖怪の仕業だと思うんだけど、あなたたちだとも思えないのよね。何か知らない？」
「今はこの土地から出払っていますし、残っているものも神社に何かするようには思えません。残念ですけど、おいらには心当たりがありませんね」
「そう。やっぱり事は簡単に進まないわね」
一番手っ取り早くて確実な情報源が消えて、小夜は肩を落とした。
だが、たまたま魔奴化と遭遇し、話を聞くことができただけ有り難いと、前向きに考える。
「手伝いが必要なら、おいらが手を貸しますよ」
「何を言ってるのよ。魔奴化は宴会の中心なんだから遅れるわけにはいかないでしょ」
小夜は背中を押すが、当人は気になって仕方がないようだ。事件に心を煩（わずら）わせるその肩をとんと叩いて、

伝説の巫女

南向春風／作

大事ではないと主張する。

「いいから楽しんできなさい。大した事件じゃないんだから心配しなくていいわよ」

どう言われようとも最初からの既定路線で、ばしばしと相手の未練を断ち切った。

「わかりました。ここにいても逆に追い出されそうなので、もう諦めて行きますね」

「そうしなさい。当分は帰って来れないんでしょ?」

「はい。おいら、最後の最後まで付き合うので、下手したら一ヶ月近くかかるかもしれません」

宴会の期間を聞いて、小夜は色んな意味で衝撃を受けた。参加した時の顛末を想像して、不参加を表明して正解だったと安堵する。

「さすがにそこまで長いと圧巻ね。悪いと思うのなら、お土産の一つでも持ってきてくれればいいわ」

「任せてください。おいらが向こうで楽しむ分、美味しい団子を用意しておきます」

「満月の夜に月見団子。美紀ちゃんも呼んで、三人で楽しみましょう」

三人で開く小さな宴会を約束して、魔奴化は話を切り上げた。

「それでは小夜さん、行ってきます」

魔奴化は変化を解いた時のように再び前転して、どろんと煙を吐き出した。

周囲に立ち込める白い煙。それが風に流された時には、化け狸の姿はどこにも見えなくなっていた。

涼しげな風が地面の落ち葉を揺らして、かさかさという音を立てた。

「ほんと、静かになるわね……」

空を仰ぐと、晴れわたる青色が広がっている。太陽は紅葉の影に隠れて、日差しは途切れ途切れにしか注がれない。当たる光に目を細めつつ、涼しさの中に垣間見える温もりを味わう。

全身に浴びるには足りないものの、今の彼女にはそれぐらいが丁度よかった。

奇々怪界～狐の里入り～

第二章

小夜が村まで行って神社に戻る頃には、空は青色から茜色に変化していた。

「鍛錬の一環とはいえ、この上り下りは相当きついわね……」

小夜は神社までの長い階段を見上げた。絶景を味わえるだけあって鳥居までは相当な距離があり、最後の難関に相応しい。何度か子供たちが正確な数を調べようとしていたが、全員がてんでばらばらな数を言い、結局は謎のままで終わったほどの段数を誇る。

森が遠ざかっていき、風景の一部として映るようになった時。彼女は鳥居に向けられた視線の先に不自然な何かがあると気づく。

（あれは……樽よね？）

鳥居の脇に無造作に置かれた木製の樽。夕日に照らされて、深い色合いを正面に浮かべている。

醤油かお酒か、もしくは悪戯の空き樽か。その大きさは両手で抱えられないほどで、中身が入っていれば相当な量だ。小夜は覚えのない樽を良い方向で捉えて、最後の山を一気に駆け上がった。

「つ、疲れた……今日はもう無理……」

鉛のように重くなった身体を休め、胸を上下させながら全身で呼吸した。
小夜が一息ついたところで、境内に意識が向けられた。
完全には片付いていないものの、落ち葉の王国は街にまで衰退していた。あちこちに飛び散った腐葉土と合わせて一箇所にまとめられて、掃除する前より綺麗になっている。建物の汚れも丁寧に拭き取られて、後一日あれば元どおりになる勢いだ。
「明日は……ゆっくりと休ませてあげないといけないわね」
彼女はもっと早く戻るべきだったと反省しつつ、美紀の頑張りに感謝した。
「こっちは私が調べておかないとね」
多少楽になった身体で、自分の横にある樽に両手を回す。やはり手を繋げるほどは届かず、ひとまずその状態で持ち上げようとする。
樽に丸々何かが入っているらしく、ずしりとした重さが伝わった。
この重さを鳥居まで運んだ方法は謎だが、子供ができる悪戯ではない。屈強な男性が担ぎ棒に樽を乗せて、ようやくここまで運べるものだろう。
小夜は樽から漏れる極上の匂いで、その中身に気づいた。一瞬偽物と疑ったものの、樽板はきっちりと閉じられて、紐もきちんと結ばれている。
「この匂い……もしかして、お酒？」
（ほんと、誰が持ってきたのかしら……）
担ぎ棒は見当たらないし、神社に戻るまで男性とすれ違ったりしなかった。さっきまで掃除していたはずの美紀が放置するわけもない。そして、そもそも村でお供え物をしたという話を聞いていない。
「怪しい。怪しいんだけど……」
朝に起きた出来事の手前、何かあればそれなりの対処をする心構えだったが――。

「まあ、お酒には罪はないんだし、せっかくの贈り物は有効に使わせてもらわないといけないわね」
「お帰りなさい。そろそろ戻ってくると思っていました」
がらっと引き戸が開いて、美紀が出てきた。
今さっき湯浴みを終わらせたのか、さっぱりとした姿で巫女装束を着ている。
「す、すいません。夕餉を用意しないといけないので、先に入らせてもらいました」
「そんなことは気にしなくてもいいわよ。掃除を一人だけでさせてごめんね」
涼しくなったとはいえ、一人だけで難儀な掃除を進めてくれた女の子に対して、小夜は感謝の意を示した。麗人のように凛々しい微笑を向けられて、美紀は頬を夕焼けに負けない色に染める。
「い、いえ、あたしが勝手にしたんです。今日は社務所の仕事をしなくていいって言われましたし、手持ちぶさただったのでつい」
ぶんぶんと手を振りながら照れくさそうに謙遜する。それがまた小夜にいじらしさを感じさせるが、本人には自覚がないようだ。
「小夜さんの方はどうでしたか？　犯人は見つかりました？」
「ううん。あの時に見た子供が間接的に関与していたんだけど、見つからないまま終わったわね」
「そうですか。まだ安心できそうにありませんね」
「魔奴化たちも出かけたし、一日も早く厄介事を片付けておきたいんだけど……こればっかりはね」
原因か元凶かわからないままだが、暗中模索のままでは有効な手が打てない。
「あれ？　あそこの樽は小夜さんが運んできたんですか？」
くいっと首を傾けて、美紀は鳥居の傍にある樽に気づいた。

彼女があれを知らないと判明して、さらに怪しさ満載のお供え物になってしまう。
「そうじゃないんだけど……」
小夜はどう説明するか悩んだ末、普通にありのままを伝えた。
「というわけだけど、誰か来ていなかった？」
「少し前まで境内の掃除をしていたんですけど……来ていないはずです」
「そう。美紀ちゃんが社務所に戻った間に置かれたわけね」
ますます謎が深まり、それに伴って怪しさも割り増しされた。
二人は鳥居の傍に鎮座する樽を眺めて、どう対処するべきか考える。
「魔奴化さんが置いていったとか？　宴会に行くから楽しんでほしいとか言いそうです」
「村に行く途中で会ったからその線はないわね。それにほら、魔奴化ならお酒よりお団子を置いてきそうじゃない？」
「言えていますね。あの量でお団子が入っていると、さすがに食べきれそうにありませんが……」
樽いっぱいに詰め込まれたお団子。
悪い意味で脳裏に刻まれそうな絵だが、小夜はさっき嗅いだお酒の匂いで上書きする。
「でも、あんなにお酒があったら使い道に迷ってしまいますね」
美紀は別のことを考えているようで、ウキウキとした様子で見入っていた。何度も小さく頷きながら呟いて、何やら考え事に耽っている。
「まずは神殿に御神酒を供えて、半分ぐらい日頃のお礼に村の人にあげて……それでも使い切れないわね」
「お酒を使う料理はたくさんありますよ。煮魚、煮卵、肉の角煮、焼き魚にも……何でも使える万能の調味料です」
そして上等なものほど、料理の味は何倍にも引き立つ。

当分はひと味違う食事が楽しめる上、村の人もささやかな贈り物に喜んでくれる。
「ああいう贈り物があると、毎日善行を積み重ねている甲斐があると思えるわね」
「そういうのって、自分で口にしたらいけないと思いますよ？」
「あはは……言われちゃったわね」
くすくすと二人で笑いながら、あの樽を有効活用することが決まる。
「あれで料理を作るのが楽しみね」
「あたしも腕を振るいます。あんな所に置いておくと危ないですし、台所まで運びませんか？」
「そうね。間違って落ちたりしたら大変だし、二人がかりなら持っていけるわね」
本日最後の一仕事を済ませるため、二人は袖を捲りながら近づく。
（匂いだけで吸い寄せられそうだったし、実際の味も気になるわね）
一度は普通に呑んでみようという誘惑に駆られつつ、小夜は浮き立ちそうな心を抑えた。
朝は突発的な不幸に襲われたものの、世の中は釣り合いが取れるようにできている。
あの出来事も、この樽が贈られるための帳尻合わせに違いない。そうだとすれば、ただ素直に受け取るだけでいい。この場に魔奴化がいないので残念だが、三人で楽しむ分だけ残しておけばいいだろう。
そんな気持ちを抱きつつ、天からの贈り物に感謝して——。
「な、なに？」
突如、鳥居と神殿の間に猛烈な旋風が起こり、落ち葉を取り込みながら渦巻いていく。
小夜はあまりの強風で目を細めて、ゴミが入らないように手の平で防ぐ。
「あーっ！　一生懸命掃除したのにーっ！」
美紀はとんでもない有様になっていく境内を目にして叫んだ。既に竜巻と化した風に手を伸ばして、台無しになった自分の労力に涙する。

（これ……やっぱり、妖怪の仕業じゃない）
上手く隠しているものの、小夜は風から微量の妖気を感じ取った。その発生源を感知ながら、一刻も早くこの迷惑極まりない風を止めようとする。
落ち葉と腐葉土、そして境内の砂利を巻き込み、特に何もしないまま一箇所に留まる竜巻。
「ううー、今日一日の頑張りが……あーもう、返してよー！」
美紀はうるうると瞳を揺らして、ぶつけるところがない不満を竜巻にぶつける。心なしか風が弱まるものの、被害は広がるばかりだ。
その最中、小夜の瞳は拳大の石が飛んでくるのを捉えた。
「美紀ちゃん、危ない！」
石の射線上には美紀の身体。小夜は咄嗟に彼女の手を掴んで引き寄せると、自分の身体に抱き寄せた。
「大丈夫？」
「は、はは、はい……ありがとうございます……」
唐突な出来事に驚いたのか、小夜は頭が沸騰したように顔を赤くして、言葉にどもりながら返事する。
「そう。本当によかったわ」
彼女に怪我がないことに肩を撫で下ろし、なぜか収まりつつある竜巻に目を向ける。
ごつん！
「…………え？」
鳥居から聞こえた不吉な音に動きが止まった。
硬い物が何かにぶつかり、その何かがぐらりと揺れるような音。
そう。まるで拳大の石が樽に的中したような音。
「あっ、あぁーーーっ！」

美紀が後ろを振り返り、知りたくない何かを指差しながら声を上げた。その声に引き付けられるようにして、小夜も人形のようなぎこちない動きで首を曲げる。
「う、嘘……」
四十五度に傾いた樽。ぐらぐらと揺れながらも倒れないという奇跡的な状態を保ちつつ、少しずつ後ろに傾いていた。二人にとって、もちろん樽にとっても、後方はまさに地獄。
「落ちませんように、落ちませんように、落ちませんように……」
短いようで、とてつもなく長い時間。
そして、今日の出来事の釣り合いなんて考慮しない方向に樽は傾いた。
「あっ……」
まさに無情。回転していた勢いはそのままで、あっさりと階段側に飛び出した。
当然、今から追いかけたところで止められるわけがないが、駆け出していた。
二人は階段を勢いよく転がる樽を呆然と見つめて、その終わりを目に焼き付ける。
ごろん、ごろん、ごろん……ばしゃん。
その身をバラバラに飛び散らせて、透明の液体が地面に広がっていく。すぐさま土と混ざって泥に変わったそれは、大地の養分として吸い込まれた。
「消えちゃい、ましたね……」
「ええ。真っ茶色にね……」
言葉少なに呟く二人。陰ろうとしている夕焼けが喪失感を煽り、小夜にある種の感情を植え付けていく。
「……美紀ちゃん」
「は、はい。何でしょうか？」
「私、今この瞬間だけ鬼になるわ」

小夜は何の感情も読み取れない無表情のまま、右手の人差し指と中指を立てて残りの指を握った。いわゆる剣印の形で九字を切りながら、鬼をも祓う清澄な響きを口ずさむ。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・列……」

「さ、小夜さん！　それはやり過ぎです！」

美紀は般若と化した巫女を羽交い締めにするように抱き、彼女の秘技である『天地玄妙神辺変通力治』に繋がる手の動きを止めた。しかし、その途端に小夜は感情を露わにして、くわっと切れ長の目を見開く。

「はーなーしーてー！　あの風を起こした妖怪を取っちめたいの！　後生だからさせてー！」

「ダメですってば！　取っちめるどころか、ぼろぼろになります！」

じたばたと子供のように暴れる小夜と、それを全力で押さえ込む美紀。

二人の巫女が空しい攻防戦を繰り広げているうちに、日は沈み夜が訪れた。

「あっ。小夜さん、あれ……」

再び境内に吹いた風。さっきの竜巻とは違い小規模で、静かにそよぐ優しいもの。

ちりんちりんと澄んだ音色を響かせて、その中心からうっすらと人形の影が生まれる。

「女の子……？　でもあれは……違うわね」

小夜より一回り小さい少女。暗闇には目立たない色を染み込ませた和服に身を包み、腰帯に鈴を括り付けている。どこか物静かで大人しい印象を与える容姿。さらにその身を申し訳なさそうに縮ませている。

そして、その臀部には狐の尻尾が一つあった。

「妖狐……」

長い年月をかけて妖力を得た狐。人化する能力や怪奇現象を起こす力を体得した妖怪。さらに力を蓄えると、最後には九尾の狐と言われる存在になる。

「ごめんなさい……」

今はまだ、生まれ立てともいえる少女は、妖狐の証明でもある尻尾を垂れ下げて、今にも泣き出しそうな表情で深く頭を下げた。

野鳥の囀りが夜のしじまに流れていき、松虫がその音色を幾重にも重ねる。時折、狼か野犬の遠吠えが山に響き渡り、その動きを止めた。

部屋は障子が閉じられていたものの、生き物の息遣いは届いていた。行灯の薄明るい光に包まれて、人の営みも知らせている。

小夜は心穏やかで居られる時間を感じつつ、朝餉を取った客間で気を休めていた。今日一日の疲労を身体から吐き出すため、壁に寄りかかったままで足を伸ばしている。

（やっとゆっくりできる時間になったのはいいんだけど……）

ちらりと部屋の反対側に目を向けると、そこには妖狐の少女。ただでさえ縮こまって消えそうなうえ、視線に気づくとすぐにぶるぶると震えてしまう。

まるで猛禽類に睨まれた小兎。狐の尻尾がなければ、誰も妖怪だと思わないだろう。

「そ、そんなに固くならなくてもいいわよ。別に怒っているわけじゃないわ」

小夜は鳥居での態度を猛省しつつ、できるだけ優しい声色で話しかける。赤ん坊をあやすように穏やかな笑顔をするが、ぴくぴくと口元が引きつっていた。

あれから少女は、話ができないほどに泣きじゃくりだしてしまった。ひとまず社務所の中に招き入れて落ち着かせるまで、それはそれは大変であった。そして、泣き止んだあとはまるで借りてきた猫のように大人しくなり、現在の状況に陥っている。

美紀はお茶を淹れるために台所に行き、今は二人きりで何とも言いがたい空気を味わっていた。

「で、でも、やったらいけないことをしてしまいましたから……」

「妖怪がああいう行為を禁止したらその意義が問われるけど、樽が壊れたのは痛かったわね」

壊れた樽を片付けた時の匂いを思い出して、苦笑いをしながら軽い調子で口にする。だがそれも追及に聞こえたのか、少女は何十回目かわからない謝罪で頭を垂れる。

（さて、どうしたものかしらね……）

初対面の相手と親しくなるには、人間も妖怪もたいして変わらない。第一印象で失敗した以上、うまく対処しなければ壁は厚くなるばかりだ。

小夜は彼女と打ち解ける方法に頭を悩ませて、ある方法を思いつく。

「さあ、さあさあさあ。こちらに注目あれ。おかしな繰り人形のお出ましよ」

いつか見た人形劇を思い出して、その口調を真似しながら懐に忍ばせていた紙人形を取り出した。それを依り代にして式神を呼び出すと、ぴょこんと生き物のように動き出した。

わざわざ床を歩かせて、たまにおぼつかない足取りに変えて転ばせつつ、少女が怖がらないようにゆっくりと近づかせていく。

最初は俯いていたものの、そのひょうきんな動きが気になってか、ちらりと顔を覗かせた。

「可愛いお姫様、初めまして。あなた様の名前を教えてもらえませんか？」

紙人形は少女の前まで歩くと、高い身分の者が行う丁寧なお辞儀をしてみせた。

（どうかこの作戦が成功しますように……）

少女は縮ませた身体を乗り出して、前屈みで紙人形と小夜を交互に眺めた。指先で触れようとした時、人形はひらりと身をかわして、くるくると回りながら少し離れた所に立つ。それが面白かったのか、目をキラキラとさせて同じように触れようと試みる。

軽業師のような軽快な動きで指を避ける紙人形。

「お姫様、みだりに殿方の身体には触らないものです」
二回目の吹き替えで操り師を思い出したのか、少女は顔を上げた。
ぎゅっと抱きしめたくなる愛らしさと、ガラス細工のようなか弱さ。猫目とは逆の垂れ目を見せて、思わず庇護欲を掻きたてられてしまう。
そこで小夜は指先で目尻を下げて、彼女が萎縮しないように穏やかな物言いで話しかけた。
「私の名前は小夜。ここの神社に務めている巫女なの」
「し、知っています……わたしたちの間では有名ですから」
「そっか。じゃあ、私の自己紹介は必要なさそうね」
どういう意味で有名なのか知りたくなるが、小夜はその欲求を一旦胸の中に押し込めた。まずは打ち解けることだけを考えて、最初の一歩を踏み出す。
「あなたの名前も教えてくれない？」
ちょこんと首を傾けて、少女と視線の高さを合わせながら聞く。
「わ、わたしは……リンって言います……」
ぽつりと漏らした呟きは、自分を押し出せていない控えめな言葉だった。
小夜は自分の存在がそうさせたと慎重に構えていたが、その一つの要因は取り除かれた。
（妖気を上手く隠していたから大物だと思っていたけど、単に得意なだけみたいね）
少女の性格によるものなら、誰でも等しく平等。鳥居での失点はある程度挽回できたと安堵して、次の一歩を刻むために頭を巡らせる。
「あっ。いつの間にか距離が縮まっていますね」
そこにお盆を持った美紀が台所から戻った。客間に入る頃合いを見計らっていたかのようだった。
「どうぞ。疲れた時には熱いお茶が染み入りますよ」

「ありがと。リンちゃんも猫舌じゃなければ飲んでね」
直に掴むと火傷する熱さで、この季節が過ぎれば湯気が出るほどだ。
小夜はちらりと上から覗いて、自分のお茶に茶柱が立っていないことを残念がった。
茶碗の高台と口を指で掴んで、両手で口元まで運ぶと、ずずっと啜るように一口だけ飲む。
「こんな感じ。本当に火傷するから気をつけなさい」
「淹れ立てが一番美味しいから飲んでみて。飲みにくいようなら冷ましてあげる」
手本を示すように同じような手付きで飲んで、美紀もにこりと微笑みかける。
リンは二人から見守られるように見つめられて、おずおずとお茶を飲もうとした。茶碗に指先で触れてびくりと離すと、その熱さでぷるぷると身体を震わせる。
小夜は息を吹きかけて冷まそうと考えたが、その前に彼女は茶碗を食卓に置いたままで口をつけた。少しばかりお行儀の悪い飲み方だが、ちびちびと飲みながら熱そうに舌を出す。
「お、美味しいです……わざわざありがとうございます……」
「ううん。あなた……じゃなくて、リンのために淹れたものだから味わってね」
竜巻の件を全然気にしていないのか、美紀は地味に重たい空気を笑顔一つで吹き飛ばした。
「あら、わたしはおまけなの？」
「そういうわけじゃありませんけど……もぉ、わかってください」
「冗談よ。玉露に勝る色合いね」
来客用の茶を味わい、頬を膨らませる美紀にぱちりと瞬きする。
「夕餉は今用意しています。まだ少し時間がかかりますけど、今日はこの子のために腕を振るいますから」
「そ、そんな……わたしのことは気にしないでください……」
「ううん。客人をもてなすのは当然だから。こういう時じゃないと、贅沢な食事なんて楽しめないの」

美紀が口元に手を当てて、リンの耳元で囁くように話す。そこにずずっと茶を飲む音を立てて、小夜が素知らぬ顔を見せる。

「質素倹約が世知辛い世の中を生きていくコツなのよ」

二人の一言一言が、小さな妖怪の緊張を解きほぐす。常に視線を下げていて、心を許しているとは到底見えない。それでも社務所に入る前と比べれば格段の進歩と言えた。

「さてと。いつまでもこうしているわけにもいかないし、そろそろ事情を聞いておかないとね」

びくりと小兎が震える。

「私、この辺りの妖怪はほとんど覚えているんだけど、リンちゃんとは初対面だと思うのよね。もしかして、他の土地から来たの？」

その問いかけにこくんと頷いた。声を出して返事する余裕はないと判断して、そのまま話を続ける。

「そう。今日の朝、神社に悪戯をしたのもリンちゃん？」

次は長い間を置いての頷き。

小夜は今回の騒動が無事に解決して、顔には出さず、心の中でほっとする。

「できれば、そこらへんの話を聞かせてもらいたいんだけどな」

今の姿から受け取れるリンの印象は、とてもじゃないが、自発的に実行できるような性格に思えない。

村の子供がどう関与しているのか、はたまた何の関係もないのか確かめる必要がある。あくまでも急かさないように気をつけて、小夜は言葉を待つ。

「話せないことは話さなくてもいいんだよ。でも、リンは良い子だと思うから……何か困っているなら聞かせてほしいな」

美紀も手に持った急須を置いて、援護するように話しかけた。

最初は二人に見られて戸惑っていたものの、リンはもじもじとしていた足下を正した。視線は俯いたま

まだが、頑なだった唇が開く。

「わたし、人を知らないといけないんです」

ぽつりと漏れた曖昧な言葉。

その意味を小夜が考えていると、何かに詰まってもごもごする口が次を紡ぐ。

「独り立ちするために別の土地からやってきたばかりで、まだ何にもわからないんです。手っ取り早く土地のことを知るためにも、人と話す必要があって……」

リンは言葉を選ぶように途切れ途切れに話して、時折間を置いた。二人の反応が不安なのか、何度も顔色を窺うように上目遣いで見てすぐに俯く。

「それなら妖怪に聞いた方が手っ取り早くない？　わざわざ人に聞かなくてもいいような……」

「最初はその方がいいと思ったんですけど、どうしてか見つからなくて諦めました……」

大宴会による妖怪の大移動。何とも間が悪い来訪で、困り果てた様子が見て取れる。

「でも、それと神社の悪戯がどう繋がっているの？」

「あの子たちが……その、言ってて」

さらに口ごもり、リンは自分の膝に置いた手をぎゅっと握った。

「何を？　どう言ってたの？」

「神社にああいう悪戯をしかけたら尊敬するって。だから……」

「なるほど。そういうわけね。要は知らない土地に来たけど仲間の妖怪がいなくて、仕方なく人に話を聞くために悪戯騒ぎに乗じて近づいていったと」

「は、はい。結局、仲間に入れてもらう機会を逃して、迷惑をかけるだけで終わりましたけど……」

事件の概要に対して、リンがそれに補足を入れて頷いた。無事に悪戯騒動が幕を下ろしたものの、当人はしこりを残しているようだ。その場からじっと動かず、何か言いたげに顔を上げたり下げたりしている。

小夜はそんな彼女の首元まで伸びた黄金色の毛先に触れて、くいっとうなじをくすぐる。
「ひゃ、ひゃうっ！」
リンは素っ頓狂な声を上げて、まるで磁石で弾かれるように飛んだ。そのままへなへなと座り込んで、腰を抜かしてしまう。
「お、驚かさないでください……」
「うん。やっぱり、リンちゃんは笑っている方が可愛いわね」
ビックリした拍子に感情を落としたのか、リンはさっきまでの落ち込みを消していた。目尻に涙が浮かんでいたものの、その表情はほのかな微笑みを得ている。
「何かあるのなら言いなさい。ここは風変わりな土地だから、そこの巫女も妖怪の相談に乗るぐらい変わり者なはずよ」
「近くの村ならあたしがよく知ってるし、あのやんちゃな子供も含めて教えてあげる。だから元気出して」
二人は小さくて愛らしい妖怪を慰めて、太陽と月のような笑顔で挟み込んだ。それが功を奏したのか、リンは部屋の隅まで下がって、きゅっと引き締めた表情で頭を下げる。
「お、お願いがあります……わたしをしばらく、この神社に置いてくれないでしょうか？」
真剣な響きを持ったお願い。その可能性を考えていた小夜は戸惑うことなく、くすりと微笑んだ。
「いいわよ」
「ほ、本当ですか？」
「ええ。誰か一人増えたところで切迫するわけじゃないしね」
むしろ、魔奴化たちがいなくなった分、寂しさが紛れて丁度いい。
そう思っていると、リンは急に両手を合わせて、仏に祈るように目を閉じる。
「ああ、お母さま……巷に溢れるおかしな噂は、全てデタラメだったようです……リンは己の矮小さに胸

が痛みます……」
余程好き勝手言われているんだろう。
小夜は心の健康のために聞こえないことにした。美紀も同様で、苦笑いを浮かべるだけだ。
「でも、寝泊まりするだけでいいの？」
「で、できれば、その……術をうまく使えるようになりたいです。変化も完璧にはできませんし……」
ぴょこんと尻尾が跳ねて、妖怪である証拠を見せびらかす。小夜に対する期待感か、ぱたぱたと左右に振って忙しない。
「へ、変化といっても、巫女のあたしたちがそんなもの教えられるんですか？」
「そうね。妖怪が扱うものとは根本的に違うけど……」
共通して必要とするものは集中力。リンのように意識が散漫になりやすいタイプには、人でも教えられるものは多いだろう。
「きっと大丈夫よ。変化のコツなら普通に教えられるわ」
そう言うと、リンは飛び上がらんばかりの勢いで鈴の音を鳴らした。その拍子に両手を上げるが、後ろの壁に裏拳をかますようなかたちになって痛がる。
「ほ、本当に嬉しいです……」
自分の手をさすりながらも喜ぶリン。やっとのことで喜びに染まった彼女を目にして、小夜はそれだけで受け入れた甲斐があると感じた。
「ただし、神社で住み込む上に修行までするのよ。あの散らかった境内の掃除も含めて、神社の雑用はきちんとこなしてもらうわよ」
「が、頑張って覚えます。美紀さん、よろしくお願いします」
「え？　あ、あたし？」

「そうね。変化も教えるんだし、姉弟子として世話してあげなさい」
まさかそんな立場になると思っていなかったんだろう。
美紀は目を見開きながら自分を指差した。そこでリンから愛玩動物が見せるような求めの視線を受けて、ぐらりと机にもたれかかる。
「リンちゃん」
「は、はい……」
「さっきの言葉、もう一回言ってあげて」
「え、えっと……美紀さん、よろしくお願いします」
邪眼にも等しいきらきらとした眼差しによる二度目の攻撃。
最初は何事もないかに見えたが、美紀はふらりと上体を起こして、リンの両肩をがっちりと掴む。
「任せて！　あたしがリンに巫女の何たるかを教えてあげる！」
彼女は遥か彼方まで走り去りそうな勢いで、そのやる気を見せる。
「決まりね。新しい仲間が増えたということで、そのお祝いに夕餉を仕上げましょうか」
「そ、そういえば、すっかり忘れていました。誰かのお腹が鳴る前に並べないといけませ……」
ぎゅるぎゅるぎゅる～……。
盛大に鳴り響いたお腹の音。その音源に目を向けると、茹で蛸のように顔を真っ赤にしたリンがいた。
「ご、ごめんなさい……夕べから何にも食べていなくて……」
何とか聞き取れるほどの小声で呟いて、どろんと煙を吐き出した。黄金色の毛並みを持つ子狐の姿になったリンは、部屋の隅っこまで走って身をくるめてしまう。
「夕餉は私が用意するわ。美紀ちゃんはそこの愛らしい妹弟子と親睦を深めておきなさい」
「え？　でも、あたしが途中まで用意したんですし……」

美紀は台所に向かう廊下とリンを交互に見ていた。成り立てほやほやの姉弟子に活を入れるため、小夜はその額をこつんと突く。
「ただでさえ、境内の掃除で疲れているんだから素直に休みなさい。これは師匠の命令よ。いいわね？」
小夜は耳元にかかった髪を手で戻して、彼女の代わりに夕餉の準備に行く。ちらりと後ろを見ると、早速、子狐のリンと接触している。
（当分は静かになると思ったけど、また少し騒がしくなりそうね）
神社の住民が一人増えて、小夜はにこやかな気持ちを抱きながら客間から出た。

チュンチュンと雀が鳴いて、朝の訪れを告げていた。
数日にわたる掃除で適度に腐葉土が混じったせいか、小鳥の餌が多くなってその評判も上々だ。常連客も増えてきて、神社の賑やかしとしては上々である。
「これが参拝客だったら、どれだけいいことか……」
小夜は竹箒の先っぽに顎を置いて、心の中で漏らした冗談にツッコミを入れた。すっかり元どおりになった境内に感慨深くなり、気が抜けて欠伸まで出てしまう。
リンを加えた神社の生活が始まり、既に一週間が過ぎた。
最初は俯いて話すだけで精一杯だった彼女も、完全には緊張が解けていないものの、二人の巫女とは顔を合わせて話せるようになった。美紀にも良い影響が出ているのか、姉弟子というより彼女のお姉さんとして世話を焼いている。その振る舞いは以前を知る小夜にはおかしく映った。
「小夜さん……お、おはようございます」
リンが社務所から出てきた。寝室は三人一緒だから二度目の挨拶になるものの、礼儀正しくお辞儀する。

まだ早起きに慣れていないせいか、声が舌足らずでたどたどしい。
「うん。二度寝しないでよく起きられたわね」
「そ、それぐらいはもう……わたしも独り立ちした以上、立派な大人ですから頑張れます……」
リンの手には同じ竹箒が握られていた。ただし、その柄は短くて彼女の身長に合わせた長さに切ってある。
最初は遠慮がちに受け取ったものの、自分専用の道具を手に入れて嬉しいのか、今ではお気に入りの一つになっている。本当は巫女装束も用意しようとしたが、さすがに彼女の寸法に合う物がないので、最初から着ている麻色の着物を使い回している。
「じゃあ、今日も頑張ってもらおうかな。二人なら掃き掃除もすぐに終わるし、そうすればすぐに朝餉を迎えられるわ」
「は、はい。小夜さんの相方を立派に務めてみせます」
神社の仕事が一区切りつくと、それぞれが自由な時間を過ごす。
参拝客自体が少ないため、社務所の事務も簡単なもので、雑務は探せばいくつか見つかるものの、期限が定められたものはない。近くの村にも小夜が行ったばかりで、向こうから頼まれない限りは無理に訪ねる必要もなかった。
二人の時は日によって違っているのだが、今回は新しく加わった仲間の希望に応えた。
場所は神社から森に少し入ったところ。境内の掃除で運んだ分も含めて、積もりに積もった落ち葉が地面を見えなくさせている。それほど木が密集していないので、歩き回る分には不便がなかった。
そこは小夜が術の修行をする際に使っている場所の一つだ。彼女は二人を連れて行き、リンのために変化のコツを教えることになった。

「よ、よろしくお願いします……」
今回教えを乞う彼女は、不安や緊張からか尻尾を垂らしていた。視線の先にいる二人を見て、口元をきゅっと結んで引き締めたり、きりりとした顔で直立している。
「うん。あたしが姉弟子として術の極意を隅から隅まで教えてあげるから任せておきなさい」
美紀は初めて自分が教える立場になったせいか、どんと胸を叩いた。背中を反り上がらせて、心なしか鼻も高くなっている。ただし、顔がにやけているために僅かな威厳も消滅している。
「残念だけど……美紀ちゃんも修行よ。まだまだ未熟なんだから一緒に受けなさい」
「で、でも、今日ぐらいはあたしも先輩ぶりたいと言いますか、一度ぐらいこっち側で教えたいかなーって……ダメですか？」
「ダーメ。二人は私の弟子なんだから師匠の言うことは聞きなさい」
二人は一間ほどの距離を取り、小夜と向かい合うように立った。リンを加えていつもの形になり、立場も元どおりになる。
美紀は一瞬だけしょんぼりとしたものの、すぐに空を仰いで、そこにある日差しと同じような明るさを見せる。
「リン、こうなったら一緒に頑張るわよ。わからないことは何でも聞いていいからね」
「は、はい。足手まといにならないようにします」
二人は姉妹のような親しさで打ち解けている。気さくで明るい姉と引っ込み思案で気弱な妹と、丁度いい釣り合いで役割を担っている。
「今回はリンちゃんに変化のコツを教えるわけだけど、私たちが使う術とは勝手が違うから間違った時は言ってね」
そう説明すると、リンはこくんこくんと水鳥のように頷く。

小夜は自分の考えを二人に語って聞かせた。
神社の悪戯といい、あの時に見た竜巻といい、子供ながらリンは妖怪としての妖力を十分持ち合わせているうえに、上手く妖力も隠せる。そこから推理すると、狐が月日を重ねて妖力を得た形ではなく、相当の力を持つ妖狐の娘だと思うべきだ。リンの発言からお母さまや独り立ちという言葉があった以上、確実と言っていいだろう。素質といえばおかしいが、リンには秘められた力が存在している。それを妨げているのは間違いなく、本人の性格から来るもの。
棚の引き出しが途中でつかえて、そこに入ったものが取り出せない状態。
リンの問題点をそう例えて、二人にわかりやすく説明する。
「つまり、すぐに動揺したり慌てたりして、落ち着きが足りないから力を発揮できない。実際、あの竜巻は見事だったしね。人に見られていない時は、それなりに使えているんじゃない？」
そう問いかけると、リンは小さく頷いた。
「誰かの前で力を使う度、すごく緊張して上手く使えなくなるんです……緊張しないようにって意識したら余計に……あう……」
美紀はごまかすように空笑いをする。
「変化の難易度はわからないけど、リンちゃんの実力なら難しくないはずよ。今足りないものは精神力の強さ。ここにいるもう一人も当てはまることよね？」
「わかった？　美紀ちゃんは繊細な術や知覚が苦手だから、そこを鍛えないといけないわよね」
「この前まで、まずは良いところを伸ばしたらいいって言ってたのに、いきなり関門ができたような気がします……」
「まずは、ね。妹弟子もできたんだから頑張らないといけないわよ」
小夜が発破を掛けると、美紀は妹弟子という言葉にしゃきっとして、沈みかけた気分を浮かせた。

「今は妖怪も遠出してるし、リンちゃんは力を隠すのが上手だから適度な修行になるわね」
「あ、あの……修行って何をすればいいんでしょうか？」
リンがちょこんと手を上げた。
「ちょっとした遊戯よ。この森の中に二人が隠れて、美紀ちゃんはリンちゃんの位置を探って御札で捕まえる。リンちゃんは逆に妖気を隠してバレないようにする。見つかった時、ちゃんと変化を保っていたら引き分けね。かくれんぼだと思ってくれればいいわ」
三人の生活が始まり、小夜がふと思いついた修行内容だ。ちょっとした遊びの要素も加えてある、我ながら良い修行だと心の中で自画自賛する。
「意外と地味なんですね。あたし、もっと派手な内容になると思っていました」
自分の想像と違ったらしく、美紀はどこか拍子抜けしたようにさっきまでぴんと張っていた肩の力を抜いた。その隣にいる妹弟子はそもそも基準を知らないため、二人のやり取りを聞いて疑問符を浮かべるだけだ。
「どんな内容を想像していたの？」
「例えば……式神を呼び出して実践形式で戦うとか、鋭いつららが天井の至るところにある氷窟で心眼に目覚めるまで避け続けるとか、崖から次々と落ちてくる岩を受け止めるとか。色々あるじゃないですか」
どこでそんな与太話を聞いたのか、美紀はぐっと拳を握りながら瞳に炎を宿した。地面の落ち葉に燃え移りそうな美紀の話に、リンがぷるぷると震えている。
「リンちゃんが怖がるからやめなさい。一番最初に言った内容はともかく、二人にはまだまだまだまだ早い修行よ」
「そ、そんなに遠いんですね……」
きっぱりと釘をさされて、彼女はうな垂れた。

「で、でも、登る山は高ければ高いほど燃えますから！」
「ええ。地味な修行こそ、いざという時に役に立ったりするものよ。二人の苦手分野を組み合わせた修行じゃない？」
小夜はお互いが成長を促す上策に頷いて、まだ尻尾を丸めてぷるぷると震えている少女に優しく微笑みかける。
「だからリンちゃんも心配しなくていいわよ。ほんのちょっと難しいお遊戯だと思えばいいから」
「わ、わかりました。美紀さんに見つからないように頑張ります」
「隠れるだけじゃなくて変化もね。これは、いかに心を乱さないで変化が保てるかどうかの修行だからね。向こうは式神も飛ばしてくると思うから気をつけなさい」
現状ではリンが有利な規約だが、彼女の性格からして釣り合いは取れていない。一つ揺さぶりがかかってしまえば、上手く隠せる妖気もあっさり表に出る。
小夜は緊張を解すついでに助言を加えると、リンは姉弟子を真似するように目に力を入れて、ぐっと握り拳をつくった。その際に鳴った鈴の音に気づくと、くるりと尻尾で包み隠して静かにさせる。
「それを持っていたら気づかれるわね。私が預かってもいいわよ」
「いいです。この鈴はお母さまがくれた大事な物ですから……持っておかないと、逆に不安になってしまいます」
そう言うとリンは軽く微笑んだ。遥か彼方にある故郷を懐かしむように薄らと、それでいて一瞬だけ大人びた雰囲気を纏っていた。
「お母さまは、他の妖怪には躾に厳しくて冷たいように見られているんですけど、本当はとっても優しいんです。この鈴も、わたしが些細な災いに巻き込まれないようにくれた物なんです」
リンの尻尾から離れて、鈴がちりんと澄んだ音色が森に響かせる。

おそらく彼女のために新しく用意した物ではないのだろう。
鈴の表面は既に塗りが剥がれて、金属自体の色をさらけ出していた。光を浴びて自らを煌めかすことはないが、その音色は何度も聴いたとおりで健在だ。
「だから、お母さまのために立派な妖怪にならないといけないんです。皆から憧れるような妖狐になってみせます」
小夜はこの小さくて健気な子狐が持つ母親に対する愛情を垣間見て、穏やかな気持ちを抱く。
「そう。いいお母さんなのね」
「はい。わたしが誰よりも尊敬するお母さまです」
リンは珍しく声を張り、さっきとは違う晴れ上がるような満面の笑顔で頷いた。
そこに美紀が背中から手を回して抱きついて、彼女の肩に顎を乗せる。
そんな二人の光景をみながら、小夜はおもむろに修行の開始を告げる。
「さあ、始めましょうか。リンちゃんは左奥、美紀ちゃんは右奥に移動して」
言われたとおり、リンと美紀が森の中に消えて行く。
二人の姿が見えなくなったのを確認すると、小夜は人差し指を直角に折り曲げ、その付け根を口内の下に押し当てた。
そして、僅かに覗いた空を見上げたまま、修行の始まりを告げる高らかな指笛を響かせた。
「さ、さすがに疲れました……」
美紀は畳の上にばたんと倒れて、そのままごろごろと転がった。術の多用と慣れない妖気の探知を行ったせいか、両手両足をぴんと伸ばして一の字で仰向けになる。

まさに満身創痍（まんしんそうい）。
日が落ちるまで続けた修行から一時。少し前に夕餉を終えて、今は寝室で就寝前の準備に取りかかっていた。部屋は客間とほぼ同じ間取りだが、床の間はなくて行灯がぽつんと置かれているだけだ。
そこに小夜の手によって布団が敷かれていく。
小夜の予想どおり、二人の勝負は引き分けで終わって閉幕と相成った。ただし、疲労の度合いにはかなりの差がある。美紀が今にも爆睡しそうな勢いだが、もう一人はゆったりとしたものだった。
「あの……大丈夫ですか？」
リンが彼女の横にちょこんと座って心配そうにしている。修行の際に何度も逃げ回ったり、慌てて自滅したものの、ほぼ肉体的な疲労で済んでいる。だが、その疲れも妖怪の強みというべきか、すでに全快しており、相手を気遣う余裕すらあった。
「だ、大丈夫に決まってるじゃない。ちょこっと頑張りすぎただけで、今はのんびりと身体を伸ばしているだけよ」
妹弟子の手前か、明らかに強がって親指を立てた。その目と頬は引きつって力がなく、今にも灰になって燃え尽きそうだ。
「だ、大丈夫なようには見えないんですけど……」
「いいのよ。明日になれば、けろっとしてるから放っておきなさい」
小夜は隣の部屋から持ってきた掛け布団を下ろして、両手で片方の二角を持って広げた。軽く手で叩きながら皺（しわ）を伸ばして、一組の布団ができあがる。
「そ、その言い方はちょこっとひどいです……」
「本当のことでしょ？　いつも太陽みたいに晴れやかで、夜になって姿を隠しても、次の日にはまた同じように輝いているじゃない」

小夜は素知らぬ振りで誉め言葉を漏らすと、その口元に笑みを浮かべて布団の位置を調整した。勘違いを誘発するような言い方だったが、美紀は見事に引っかかったようで、疲労困憊（こんぱい）の表情を別の色に染める。
「そ、そういう言い方はちょこっと卑怯です……」
勘違いした恥ずかしさを隠すようにごろんと転がって、彼女は小夜に背中を向ける。手足をばたばたとする体力もないためか、そんな静かな抵抗でじっとしている。
「照れることないじゃない」
小夜のフォローに、美紀は結局のところ笑顔になっていた。寝室に一輪の花が咲いて、小夜は残り二組の布団を用意するために立ち上がる。
「なんか、いいですね……」
そこにぽつりと漏れた声。
「二人を見ていたらうらやましくなりました。わたしはお母さま以外のかたと……」
「何を言っているの。ここにもういるじゃない」
小夜は寂しがり屋の小兎の身体を前から抱きしめた。
「人一倍怖がりで弱虫で、まだまだ人肌が恋しい女の子。でも努力して強くなろうとしている頑張り屋さん」
「そして、将来有望の妖狐でしょ？　あたしたちが傍にいるんだから寂しがる必要なんてないからね」
美紀も後ろから抱きしめて、リンを挟み込むような形で抱擁した。二人の温もりに包まれて、彼女は最初こそあたふたしながらも、すっと力を抜いた。
「あ、ありがとうございます……嬉しい、です……」
リンは目尻にたっぷりと涙を溜めて、その琥珀色の瞳を揺らしながら、溢れないように唇をへの字に曲げる。
親元から立派に独り立ちしたとはいえ、子供には変わりない。

別の土地に辿り着き、やっとのことで衣食住を確保して、神社での生活にも慣れ、二人のやり取りを自分と母親に被らせたところで、ようやく郷愁に駆られたのだろう。
小夜は胸の奥から沸き上がる親愛の情を抑えきれずにいた。自分がリンに回した腕に彼女の手の平がすっと添えられて、熱い雫を拭うように置かれる。
畳の上に垂れていた尻尾が、いつの間にか元気を取り戻して美紀のお腹をくすぐる。
「こーら。あたしを笑わせて場を和まそうとするなんて反則よ」
「ご、ごめんなさい。わざとじゃなくて尻尾が勝手に動いて……」
ぐりぐりと後ろから頭を擦り付けられて、リンは顔を上げてあたふたしながら自分で尻尾を押さえた。その時にはすっかり懐郷病もなくなり、いつものとろんと垂れた黄金色の瞳で、その愛らしくて守りたくなるような微笑みを浮かべた。
「うんうん。やっぱり、リンは笑顔の方が可愛いよね」
「そ、そんなにすりすりされると困ります……あう」
美紀も同じ気持ちを抱いたのか、さらに身体をくっつけてあわあわと慌てふためく様を堪能しているようだ。ほんわかと和んで、そのままもたれかかりそうな呆けた顔をしている。
「ほどほどにしないと、リンちゃんが溶けていなくなっちゃうわよ。ほら、顔が真っ赤になってるじゃない」
また一つ肌寒くなった秋の夜長には心地良い温もりだが、いつまでも三人で抱き合うわけにはいかない。
小夜はふわりとしたリンの柔らかさに未練を残しつつ、まだ済んでいない寝床の準備を再開するために起き上がる。
「すぐに用意するからもう少しだけ待っていてね」
二人はまだくっついたままで、美紀は胡坐をかいていた。その上にリンを座らせて、本当に仲の良い姉妹のように振る舞っている。

「一つ提案があるんですけどいいですか?」
そこに美紀が声をかける。余程の名案があるのか、薄暗い灯りの中で一際輝く瞳を瞬かせる。身体も前のめりにさせて、豊かに実った二つの果実がリンにのし掛かっている。
「何？　夜更かしは認められないわよ」
「いえ。そうじゃなくて、今日は三人一緒に寝ませんか？　丁度一つだけお布団を敷いたところですし、肌寒い日にはぴったりです」
「それは……うん。たまにはそうやって寝るのもいいわね」
三人が川の字になり、一つの布団に身を寄せ合いながら眠る。多少は横幅が狭いものの、寝相が悪くなければ問題ない。季節も冬に近づいているため、人肌で温まるには丁度良い時期だ。
「少し早いけど寝ましょうか。二人とも修行で疲れているでしょう?」
「今日は普段、小夜さんが何の苦労もなくやっていることのすごさを否という程実感できました……」
「継続は力なり、よ。続けていけば、いずれ同じことができるようになるわ。最初は何事も上手くいかないものよ」
健闘賞を取った美紀を慰めつつ、小夜は部屋の端に敷いていた布団を一度持ち上げて中央に動かした。
「そろそろ灯りを消すわよ。上着はきちんと畳んで、部屋の脇に置いておきなさい」
「はーい」
二人は子供丸出しの元気の良い声を出して、そそくさと上着を脱ぐ。美紀が少しおぼつかないリンの脱衣を手伝い、小夜もしゅるりと衣擦れの音を立てて、白一色の襦袢だけになった。
寝室は行灯の光に照らされて、三つの人影を生み出していた。まるで影絵のように襖に映り、巨人が部屋で暴れているようにも見える。
布団はそのぼんやりとした色合いを白布に照らして、一枚の膜を通して照らされる橙赤色は、どこか優

しげな温かみを与えていた。
秋の夜長を照らす灯火、一日の終わりを告げるように小夜はその灯りをふっと消した。

小夜はまだ眠りに入っていなかった。
一人きりで過ごしていた日々を遠い記憶に変えるいくつもの温もり。魔奴化との出会いから始まった数多くの出来事を思い出して、その掛け替えのない贈り物に感謝する。
「もう寝た?」
小夜はまったく寝息が聞こえないため、試しに小声で話しかけた。すると、二人がごそごそと音を立てて、身体の向きを彼女に変える。
「やっぱり……まだ起きていたのね」
美紀は悪戯がバレた子供のように舌をぺろりと出して、リンはこれもまた子供が甘えるようにすり寄って指先で襦袢を摘んできた。
「何となく寝付けなくて……すっごくぽかぽかしてて、すぐに寝たらもったいない感じがするんですよね」
「わ、わたしもです。小夜さんたちに包まれて温かくて、このまま朝になるまで起きていたくなります」
「それは嬉しいけど、寝不足になって明日のお務めがつらくなっても知らないわよ?」
自分の予想が当たり、小夜は二人が同じことを考えていたと知って喜ぶ。部屋の薄暗さで二人はぼんやりとしか見えないが、その表情は簡単に想像できた。
「大丈夫です。こうなったら小夜さんも道連れですから」
「悪い子ね。でも、二人が眠たくなるまでつき合ってあげる」
布団が包む温もりにまどろんで、松虫の子守歌に身を委(ゆだ)ねる。そして、一緒の寝床に入った二人と共に

束の間の雑談に興じることに。
普段と比べて、三人の距離感が皆無に等しいせいか、いつもなら話題にしない質問も投げかけていた。
「リンはどうして変化を完璧にしようとしてるの? 修行を始める時、変化にこだわっていたよね?」
美紀の癖になっているのか、リンの身体に手を回して人形のように抱きしめながら問いかける。彼女も心地良いものになっているらしく、嫌がるどころか身を委ねている。
「そうね。私も聞いてみたいかも」
今回の修行をする際、小夜が何度も希望を聞いたものの、その答えはいつも人への変化だった。尻尾が隠せなかったり、動揺したら狐に戻ったりするものの、あちこちただ歩き回る分には十分だ。
「中途半端で……終わったからなんです」
二人の疑問に答えるようにして、彼女はぽつりと呟いた。
決して悲しい色を含んだ声ではなく、確固たる決意すら感じる言葉。
「この土地のことを知るために、手っ取り早く子供たちに混ざろうと思ってあの騒動を起こしたんですけど、全部中途半端というか、ただ迷惑をかけただけで……」
襦袢が不意にくいっと引っ張られる。リンの指に自然と力がこめられたのだと小夜は気づく。
「ですから今度は……ちゃんと、正攻法で真っ正面から会って話そうと思っているんです」
「あと何週間かしたら魔奴化さんたちも戻ってくるんだし、聞きたいことがあれば何でも教えてあげるんだけどな」
美紀はもっともな意見を口にして、初めての妹弟子を甘やかす。神社の生活に一人加わり、元気溌剌でまっしぐらな彼女も別の面を持つようになっていた。
「じ、自分の目で見聞を広めるのも大事です。妖怪だけじゃなくて、人とも関わりを持たなければいけないと、お母さまも言っていました」

「リンちゃんのお母さんは、人にも優しい妖怪なのね」

この土地では、人間と妖怪が友好的な関係を築いているものの、世界中がそうだと言えるわけではない。ここでも驚かし驚かされる力関係には違いないし、妖怪がふらりと村人の前に現れれば、腰を抜かし、逃げ去るだろう。

友好といっても、妖怪が悪意を持って人間と接しないだけだ。この神社の巫女のように普通に接する人間は、それだけで希少だ。

「はい。人間は複雑怪奇だからこそ、その生き方が妖怪には決してない味わいがあるんだって。だからこそ、人間と関わる価値があるって……そう話していました。わたしはまだ理解できていませんけど……小夜さんや美紀さんは味わいのある人だと思います」

リンが秘める妖力の強さからして、名の知れた妖狐なのだろう。

その者が人間と好んで関わっていると知り、小夜は彼女と引き合わせてくれたことに心の中で感謝した。

「味わいがあるということは、リンのお母さんは変に年を食っているって言いたいんだよね?」

「……た、多分、色んな経験や考え方を知って大人びてると言いたいんじゃないでしょうか?」

「そしたら、あたしはまだまだかな。小夜さんにはぴったりだと思いますけど、未熟もいいところですから」

単に謙遜した美紀をからかうため、小夜は待ち針で突っつくような言い方をする。

「あら、つまり私が酸いも甘いも噛み分けたおばさんと言いたいのね。美紀ちゃんがいない頃から一人でお務めに励んでいたせいで、すっかり年寄りに近づいていると言いたいわけね」

「そ、そういう意味で言ったんじゃないんですよ。あたしは小夜さんの雰囲気が一回り大きく見せているというか、七福神の巫女として堂に入っているというか、あたしなんかよりずっと……」

ぐいっと前のめりになりながら弁解して、彼女は川の字をさらに近づけた。挟み込まれるかたちのリンが目の前の胸に顔を埋まって、むぐむぐと口を苦しそうに動かしている。

「冗談よ。このままだと、リンちゃんが窒息（ちっそく）するから放してあげて」

その言葉でようやく気づいたのか、美紀は鳩が豆鉄砲を食ったようになり、次の瞬間に抱きしめていた手を離して布団の隅に寄る。

「ご、ごめんね。つい熱が入って……あ、あはは……」

「だ、大丈夫です。そんなに苦しくなかったですから……」

そこでやっと解放されて、リンは大口を開けてぷはっと息を吐いた。多少の息苦しさが見え隠れしたものの、何ともないようだ。

「てっきり失神寸前だと思ったけど、心配なかったわね」

「は、はい。小夜さんと違って、美紀さんの胸は……むぐっ!」

何かを言おうとしたリンの口が唐突に塞がれた。まるで幽鬼のように音もなく近づいた美紀の手の平によるものだ。

「世の中にはね、絶対に言っちゃいけない言葉があるの。リンは今それを口にしようとしたの。この神社にいる以上は覚えておきなさい」

リンの身体を反転させて見つめ合い、しみじみと万感の思いを込めて話す。余程感情が込められているのか、小夜の位置からリンは後ろ姿しか見えないものの、こくんこくんと頷いた。

「何の話をしているの? お姉さんにも教えてほしいわね。そうじゃないと……えいっ」

二人の会話内容がいまいち読み取れず、その輪に入ろうと身体を動かした。掛け布団を巻き寿司のようにして、小夜も含めた三人を包み込んだ。今までより密着度が増して内緒話もできないようになる。

「さあ、内緒話なんてやめて、私にも聞かせなさい」

小夜の瞳に眠る黒の金剛石をきらりと輝かせて、美紀に視線を送る。すると、美紀は急に目が泳いで落ち着きをなくした。

「む、村の子供と混ざるコツを教えただけですよ。そうよね？」
「えっ？　あっ、はい。そのとおりです」
明らかに不自然な間を置いた同意。そのまま追及してもよかったものの、小夜はその密約を問いたださずに終えた。掛け布団を再び元に戻して、狭い範囲でどたばたして熱気がこもる内部に空気を取り込んだ。
「完全な変化をするためにも、修行は頑張らないといけないわね。今回で片鱗が見えたから近い内にできるようになるはずよ」
「ほ、本当ですか？」
「私が保証するわ。美紀ちゃんの修行にも役立っているし、明日もびしばしいくわよ」
小夜が妖怪としての潜在能力に太鼓判を押すと、本人は桜が芽吹いたかのように破顔する。布団の中で尻尾がもぞもぞと動いて、文字通り全身で喜びを表現していた。
「す、少しだけ手加減してくれると嬉しいです。もしかしたら、明日は筋肉痛かもしれないので……」
そして、美紀は明日の健康状態を口にして頬を引きつらせる。
「それはいいわね。変に走り回る癖を止めて、妖気を探る修行になるもの。今日も何度注意しようと思ったかわからないわ」
「さ、小夜さーん……」
ご無体な宣告を投げつけられて、そのままへなへなと全身を脱力して枕に顔を埋めた。
新しい同居人。新しい仲間。新しい家族。
小夜が一人で過ごしていた神社に美紀が加わり、そしてまたリンが新しい色を加えていく。お互いがそこに重ねる色を少しずつ加えて、いつか区別がつかないほどに混ざり合う。
秋の夜長はささやかだが、近いようで遠い場所にある夢を許すほどの穏やかさを持っていた。

難波久美／作

奇々怪界 〜狐の里入り〜 第三章

季節の変わり目は体調と同じように天気も崩れやすく、前日まで晴天でも曇りに一転したりする。

小夜が住む土地も例外ではなく、今はどんよりとした空が広がっていた。真っ白な雲ではなく灰色の暗い雲が厚く覆い被さり、雷混じりの大雨が降ってきても不思議ではない。

強制的に気分まで沈むような天気で、とても洗濯日和とは言えず、境内に散らばる落ち葉も湿気を纏っている。風が運ぶ濃厚な緑の匂いも、どこか土臭い。

「雨が降った後は掃き掃除が大変なのよね……」

小夜は土がぬかるんで、掃きにくくなる雨上がりの掃除を想像して溜息を漏らす。そうなる前に終わらせようと、朝から竹箒を手にしている。

二人の修行は、毎日ではないものの、その熱心さに応えるように続けたおかげで成長も著しい。

美紀は妖気を探る能力の低さに難点があったが、適度な好敵手（ライバル）かつ妹弟子の存在でいい方向に開花したようだ。

最初こそ走り回ったり威嚇（いかく）して探っていたものの、今では基本に忠実な感覚による正攻法で探している。

まだ多くの粗が見受けられるが、そこは回数を重ねる内に改善されるだろう。
　その刺激を与えたリンも、一回目と比べれば格段の進化があった。生来の気弱さは変わらないものの、軽く驚かされた程度では狐に戻らないようになっていた。
　そして、驚かしや緊張に対する耐性だけではなく、変化自体にも修行の成果が現れていた。
「リンちゃん、心の準備はできたわね？」
「は、はい。もう大丈夫です」
　小夜と一緒にいるリンは、多少の硬さを残した声を発した。
　だが、境内にはいつものちんまりとした愛らしい姿がなく、彼女を上目遣いで見つめる黄金色の瞳もない。ちりんちりんと鳴る鈴の音の向こう側には、両の手で抱けるほどの小さな狐がいた。紐を首に括りつけるようにして、鈴が落ちないように止めている。
「ちょっとした確認だから軽い気持ちでやりなさい。失敗したところで何かあるわけでもないしね」
「でも、これが成功したら村に行っても大丈夫なので……絶対に成功させてみせます」
　完全な人の変化ができるかどうかを確認するための考査。変化を解いたリンが子狐の姿で、そのやる気を言葉に滲ませる。
「妖怪が多いといっても、縁遠い存在には違いないのよね。妖狐だと知られたらきっと怖がられるわ」
「そ、そうですよね。やっぱり……」
　リンは耳を垂らして、不安とも緊張とも読み取れる声を漏らす。まだ怖がっていないのは幸いだ。
　子供は大雑把なようで繊細だ。自分が知らないものは排斥して、慌てて逃げてしまうだろう。だからこそ、失敗して馬脚を露したりしないように修行している。
「でも、まずは私という関門を潜り抜けないといけないわね。心配でリンちゃんの後をついていかなくていい証拠を見せてみなさい」

「は、はい。まだ失敗したりしますけど、今日は成功してみせます」
　人に変化した時は垂れ目になる瞳も、今は小夜に似た切れ長の狐目だった。暗闇でもきらりと光る黄金色を二つ覗かせて、そこに眠った野生を滲ませる。
　石畳の上にその四本足を伸ばして、今にも小夜に飛びかかりそうだ。その踏ん張りに固い意志を感じさせ、彼女は変化する瞬間を見守る。
「い、いきます！」
　その姿とは不釣り合いで愛敬のある声と共に、子狐はくるりと前転しながら煙を吐き出した。
　魔奴化と同じで全身を包み込む白く濃い煙。まるで意志を持ったように留まり、不意に風で流されてその中に隠れたものを露わにする。
「ど、どうでしょうか？　尻尾もちゃんと隠せていますか？」
　さっきまで子狐がいた場所には、小夜の愛すべき珍客が立っていた。麻色の和服を着て、腰帯には紐を括りつけた鈴がちりんちりんと音を鳴らす。一見、何も変わらないように見えるものの、その姿には大きな変化があった。
　リンを一目で妖狐と知らしめる尻尾。それが最初からなかったように消えている。どこからどう見ても人間と区別がつかず、完璧な変化に成功したことを物語っている。
「文句のつけようがないわね。妖気も上手く隠せているし、村の人たちになら気づかれたりしないはずよ」
「本当ですか？　わたし、ちゃんと人に変化できているんですか？」
　まだ自分の成功を信じ切れていないのか、リンは顔をお尻の方に向けて、くるくると回りながら確認する。その表情は歓喜に酔いしれるというより、戸惑いに揺れていた。
「ええ。そんなふうに確認しなくてもいいから安心しなさい。今のリンちゃんは普通の人が見たら可愛い女の子としか思われないわ」

小夜は彼女のお尻を埃でも払うかのように叩いて、きちんと尻尾が隠れていると気づかせる。そこでやっと実感が沸いたのか、成功した喜びよりも驚きを強くさせて、ぴょんと飛び上がった。
「小夜さん、小夜さん！　見てください！　これ、見てください！」
その成功に感情が抑えられないのか、リンは尻尾を出すために開けた着物の隙間を閉じて、その裾を両手でぐっと下ろした。何の盛り上がりもないお尻を見せて、珍しく大声を出してはしゃいでいる。日頃はとろんとした目つきも目尻を上げて、全身から活力を溢れさせていた。
「これならお墨付を出してもいいわね。神社に来た新しい巫女だって村の人に紹介してあげたいわ」
「だ、大丈夫です。わたし、一人で村まで行けます」
念のために付き添うと勘違いしたんだろうか。
リンは慌てたように声をどもらせた。つま先立ちで見上げて、まるで嘆願するように唇をきゅっと結んでいる。その手の平も握られて、胸元で拳がつくられていた。
「心配しなくても、リンちゃんの頑張りを邪魔したりしないわよ」
くしゃりと彼女の頭を撫でて、小夜はそのこだわりを受け入れた。胸の内側で秘められているであろう、強い想いを汲み取り、妹を見守るような優しい瞳を向ける。
「でも、十分に気をつけなさい。まだ付け焼き刃に近いから、もしも驚いたりしたら変化が解けるわ。修行中に何度もあったでしょ？」
美紀との修行中、彼女の式神に見つかったり目にするだけで、その変化にぼろが出ていた。驚いて狐に戻った時もあり、それは前回も起こっている。
小夜は常に二人の様子を眺めていたため、その回数も把握している。本音はリンが失敗したら助けられるように見守りたいが、きっと信用されていないと落ち込むだろう。今回ばかりは後を追わず、彼女の成功を祈るだけで我慢する。

「私としては、子供と顔を合わせるだけにした方が安心ね。リンちゃんの目標である仲間に入れてもらうのは難易度が高いわ」
今回の悪戯騒ぎはリンが犯人だったが、村の子供はあちこちで騒動を起こしているやんちゃ坊主だ。大半は大人が叱って沈静化するものの、次々と新しい遊びを思いついて、森や山を駆け回っている。うらやましくなるほどの活力に満ち溢れた子供と一緒についていき、今の彼女が変化も解かずに終えるのは至難の技だ。子供に正体が知られて怖がられる絵を想像して、小夜はちくりと心が痛んだ。
「だから約束して。今日は子供と会ったら帰るって」
小夜は目の前にある黄金色の髪を指先で絡めて、それを解きながら柔らかな頬に触れる。今はまだ希望に満ちている彼女に頼んで、次の機会に回すように話した。
出足を挫く言葉が投げられたものの、リンはめげることもなく、口元を綻ばせて小さく頷いた。
「はい。小夜さんの言いつけを守って、すぐに帰ります」
「いいの？　楽しみにしているようだから気が引けるわね」
「わたしのこと、心配してくれているのわかりますから……それなのに意固地になったら、ここに居させてくれるお二人に悪いです」
その微笑みはどこか他人行儀で、その言葉はいい意味で言えば慎みを持った物言いだった。いつもならその感情を示す尻尾もなく、穏やかすぎる表情が不可思議だった。
「そういう言い方はしないの」
唐突にこつんと額を小突かれて、目をぱちくりとさせるリン。その瞳を獣のように鋭い目元が捉えて、その息遣いが伝わるほどに密着した。彼女の前髪を指先で払い、ぐりぐりと額を押しつける。
「リンちゃんには私たちが居てもらっているの。もうこの神社に欠かせない家族なの。だからそんなふうに言わないの。いい？　わかった？」

「あ、あう……」
　小夜の額から熱が映るようにして、リンは耳の先まで真っ赤になる。彼女が顔を逸らそうとしても逃がさず、しばらくの間そのままでいた。
「わ、わかりました……」
　その恥ずかしさに負けてか、彼女は全身が茹で蛸になる寸前で頷く。
「ならいいわ。ほら、行ってらっしゃい。今日はお祝いに豪華な夕餉を用意しておくわ。雨に気をつけて、本降りになる前には帰ってきなさい」
　そして、どこか一歩を踏み出せないでいるその背中を押して、彼女の帰る場所はここにあると念を押す。
「小夜さん……」
　その意味を正しく受け取ったのだろうか。
　リンは静かに染み入るように呟くと、そっと添えるように両手を胸元に重ねた。何度かの深呼吸を置いて、心の底に溜めていた衝動を吐き出すように駆け出した。
「行ってきます。小夜さんの料理、楽しみにしています」
　軽快な音を立てて石畳を蹴り、彼女は何度も振り返りながら鳥居を潜る。長い階段を駆け下りる時も同じ行動を繰り返して、いつの間にか小夜の瞳には豆粒のような小ささになっていた。
「行っちゃったわね……」
　ぽつりと漏らして、彼女は鳥居から長く続く山道を眺めた。その間を紅葉が挟み込んで、夢を追う少女の行き先を彩るように映る。景色に目を奪われたせいか、視線を戻した時にはリンの姿を見失っていた。
　そこで聞こえた、がらがらと引き戸を開ける音。小夜が振り向くと、もう一人の巫女が髪もとかずに出てきた。
　急いで着たのか、袴は皺が寄った上に腰紐の結びが適当で、白衣の合わせも整えられておらず、みっと

もない。草履も鼻緒にかける部分が間違ったのか、石畳の上で一度履き直していた。
「美紀ちゃん、行儀が悪いわよ。あちこち乱れっぱなしじゃない」
　小夜は呆れつつも見ていられなくなり、竹箒を鳥居に立てかけて近づいた。巫女装束の乱れを直して、彼女が手に持っていた白布で括って、いつも通りの髪型にする。
「山道は神様の通り道なんだから恥ずかしい格好をしたらダメよ。村の人が参拝しに来ていたら、きっと目のやり場に困るわ」
「すみません。二人の話し声が聞こえたから早くしないといけないと思って。もしかして、もう出かけたんですか？」
「ええ。一足遅かったわね」
「やっぱり……今日じゃないと、高を括っていたのが失敗でした」
　美紀はがっくりと肩を落として、額に滲んだ汗を手の平で拭った。早朝から顔色を曇らせて、今の空と同じような陰りを見せる。
「どうかしたの？　何か用事でもあった？」
「いえ。そうじゃないんですけど、行く前に姉弟子として助言したかったというか、緊張を解いてあげようと思ったんです。それと……変化がすぐに解けるから無茶しないように。だからまだ先の話だと思ったんですけどね」
　どうやら妹弟子の成功を願うため、同じことを考えていたらしい。自分の予想を裏切られるという彼女らしい失敗に笑みを浮かべる。
「あーあ。せっかく良い台詞（せりふ）を考えていたのにな」
　ぴんと逆立った寝癖を手の平で押さえつつ、美紀は鳥居まで歩いてその先を見下ろした。その横に小夜が並んで、神社の先に広がる紅葉を一緒に眺める。